

II 会議内容

1. 実務者会議開会式

歓迎挨拶

福岡市長 吉田宏

福岡市長の吉田でございます。開催市の市長として一言ご挨拶申し上げます。皆様、ようこそ福岡にお越しくださいました。皆様に心から歓迎申し上げますとともに、第8回アジア太平洋都市サミット実務者会議を本市において開催できますことを心から嬉しく思います。昨年9月には中国・大連市にて第8回市長会議が開催され、私も出席いたしました。34都市の参加を得て大変有意義な会議となりました。大連市の皆様のご尽力に対し、改めて心よりお礼申し上げます。

このアジア太平洋都市サミットは、急激な経済成長に伴って発生する都市問題の解決に向け、都市間ネットワークの構築を図ることを目的として1994年に本市が提唱して創設したものです。会員都市も29都市となり、そのネットワークは着実に充実してまいりました。

21世紀を迎えた現在、社会を取り巻く環境は設立当初の拡大成長志向より大きく変化してきました。昨秋の世界同時不況などを経て転換期を迎えている一方で、グローバリズムと情報化が進み、都市間の均質化の傾向が進んでいるとも言われております。各都市が成長していくうえでも、自らの個性を磨き、魅力ある都市づくりを行っていくことが、今後ますます大切になってきています。

そのような流れの中で、近年、文化芸術活動が都市づくりに果たしうる役割があらためて見直されてきております。産業の活性化の原動力となる一方で、最近では教育や福祉などの分野においても新たな解決手法を提供できるものであることが注目されています。行政・企業・市民、それぞれの活動主体が連携し、相乗的な効果を生み出す取り組みを展開することが、これからの都市の課題となっています。そこで今回は、「文化芸術活動による都市の魅力づくり」をテーマといたしました。大いに意見交換や情報交換を図り、皆様方が今後のヒントとなるような知見を獲得すること、また、参加都市間の連携がさらに深まり、アジア太平洋地域の発展につながることを期待しています。

また、本市は長いアジア各地域との交流の歴史を背景に、毎年9月を中心に「福岡アジアマンス」として、アジアの文化・芸術・学術などの幅広い催しを行っており、今年20周年を迎えます。この福岡アジアマンス20周年の機会に皆様をお迎えすることができましたことも大変嬉しく思っております。会議のプログラムの中で、アジアマンス事業の視察も行われます。アジアと学び合い様々な協力を通じてアジアとの共生的発展を目的に開催するこれらの事業を、是非皆様にも体験していただきたいと思っております。

最後になりましたが、この第8回実務者会議が有意義で実り多きものとなりますこと、またご列席の皆様のご健勝とご発展を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

2. 本会議

(1) 開会式

①主催者挨拶

福岡市総務企画局国際部 国際部長 中川伸司

このたびは「第8回アジア太平洋都市サミット実務者会議」に御参加いただき、まことにありがとうございます。昨日は市長がごあいさつさせていただきましたけれども、本日からの御参加の方もいらっしゃるということでございますので、改めて主催者として、一言ごあいさつ申し上げます。

このアジア太平洋都市サミットは、急激な経済成長に伴って発生する都市問題の解決に向けまして、都市間のネットワークの構築を図ることを目的として、1994年でございますけれども、本市が提唱し創設したもので、隔年で市長会議と実務者会議を開催しております。今年で8回目となります実務者会議におきましては、「文化芸術活動による都市の魅力づくり」をテーマとし、7カ国 17都市の行政実務者の皆様、そして、今日基調講演と座長をお引き受けいただきました吉本光宏様、さらに国連ハビタット福岡本部の皆様、企業やNPO、市民の皆様にも参加していただくことができました。

成熟社会を迎えまして、都市の個性、文化力が問われております昨今、改めて文化芸術が都市づくりに果たす役割、そして機能が見直されてきており、アジア太平洋の各都市もさまざまな取り組みを進めております。本市も昨年末に文化振興におけるビジョンを策定し、「全ての人々にとっての文化芸術、未来へ向けての文化芸術～Arts for All, Arts for Future～」をスローガンに掲げました。文化芸術活動による都市の魅力づくりを展開する上では、すべての人々、言いかえれば、行政・市民・企業をはじめとするそれぞれの担い手が役割を十分に発揮し、連携を図りながら取り組みを進めていく必要があります。

本日は、国内外の文化芸術行政に精通しておられます吉本様における基調講演、そして会員都市における先進事例発表、さらに本市における市民・企業による創造的な事例発表などの内容を予定しております。さまざまな見地からの積極的な意見交換がなされ、参加者にとって示唆に富み、将来を見据えた方策のヒントが得られる場となることを期待しております。

最後になりましたが、本日の会議が、参加者の皆様にとって有意義なものとなりますことを心から祈念いたしまして、ごあいさつとさせていただきます。

②来賓挨拶

国際連合人間居住計画（ハビタット）福岡本部 本部長 野田順康

皆様にはこの福岡に御来福いただきまして大変ありがとうございます。

また、このアジア太平洋都市サミットというのは、提唱されてちょうど15年になるということで、これも皆様方の努力の結果ではないかと思っております。また、本日の実務者会議は、文化芸術活動

による都市の魅力づくりということですが、私ども国連ハビタットというのは、国連機関の中でシティエージェンシーということで、都市問題をずっと扱ってきておるわけですが、ここ 10 年ぐらいの間に 1 万人規模の世界都市政策フォーラムという会議を開いてまいりました。私どものフォーラムの中でも、いわゆる都市文化による都市の魅力づくりということでさまざまに議論をしてきています。

このパワーポイントを、ごらんいただきますとわかりますように、まずは 2004 年にバルセロナで開きましたこの世界都市政策フォーラムで、都市の魅力をつくっていく上での文化ということをいろいろ議論したわけですが、最大のその問題は、現在グローバリゼーションが進む中で、都市文化がむしろ衰退している方向にあるということ、非常に 2004 年の会議では危惧をしたという経緯があります。結局グローバル化による都市文化、文化の平準化といったような動向が世界的に見られる、そういう中で歴史的にも、また近代的にも、作り出しだすそれぞれの都市の個性というものをどう維持していくかということが、非常にこの 2004 年の会議でも議論されましたし、例えば、その言語という問題を一つとりましても、今大体世界に 6 千ぐらいの言語があるとされておりまして、今世紀末にはその言語というものが恐らく半分になるのではないかと、そういった言葉の面からの文化的衰退と云っていいのかわかりませんが、そういう現象も見られてきています。

この世界都市政策フォーラムの中で、昨年は中国の南京で会議を開きました。これは第 4 回の世界都市政策フォーラムです。これは調和のある都市というものを議論してきたわけですが、これはアジア太平洋都市サミットの中でも何年か前に議論されてきたわけですが、その調和のある都市というものを考えていく場合に、やはりフィジカルな、物理的な都市計画だけではなかなか都市の調和とが保たれないということ、私たちはいろいろ議論しております。また、やはり都市の魂、スピリッツ、そこをどう考えていくかということが、調和ある都市を考えていく上ではとても重要ではないかというふうに、私たちの会議でも議論してきたところです。

そういった意味では、それぞれのまちが持っている都市の文化というものを、どういう形で維持をしていくかということでもあり、最近特に創造都市、これはまた後でいろいろ議論があらうかと思いますが、リチャード・フロリダやランドリーといったような学者が、創造都市というものが 21 世紀の世界を支えていくのではないかとことを盛んに議論している最中で、そういった都市のクリエイティブネスということも非常に重要です。また、文化との関係においては、都市のいわゆるアイデンティティというものをどういった形で維持をしていくかということも、とても重要になっているわけです。

昨年の南京のフォーラムで南京宣言を出しておりますが、特にその歴史的、文化的遺産をどうやって維持をしていくかということ、宣言の中でもうたっているところです。

少し私ども都市政策フォーラム開いた都市の御紹介をさせていただきますが、第 2 回はスペインのバルセロナで開いております。バルセロナというのはカルタゴの時代、ローマ時代から非常に長い歴史を持つ都市で、非常に長い歴史に基づいて作り出された都市文化と、近代的な文化を融合させながら、非常に魅力的な都市をつくり出しているという面で、私どもとしてはベストプラクティスに値すると思っております。皆様御存じのピカソという画家が活動、活躍したのもバルセロナでありまして、サグラダファミリアというすばらしい教会も存在している都市です。

一方、2006 年の第 3 回の世界都市政策フォーラムは、カナダのバンクーバーというところで開きました。エコノミスト、ニューズウィーク、ウォールストリートジャーナルで、世界で最も住みやすい都市はどこかというとき必ずこのバンクーバーが上位に入ってきます。バンクーバーは歴史的に非常に若い都市です。1900 年代、19 世紀の後半ぐらいから作り始めた都市で、特にこの戦後急速に発展を

していく、特にその発展の仕方が多様な文化というものを中心に据えた都市で、例えばバンクーバーに行かれますと、ここには非常に大きな中華街もあります。また香港の返還の際には大量の中国の方々を受け入れたということもあり、非常に多様性に富んだ都市の魅力を持ったのがバンクーバーで、また、そういった近代的な都市づくりとカナダのすばらしい自然を融和させた持続的な都市づくりをしていることで、非常に魅力的な都市なのではないかと私も考えているところです。

それから昨年、2008 年は、中国の南京で第4回の都市政策フォーラム、これも8千人を超える参加者がありました。南京も、皆様、中国から御参加の方よく御存じだと思いますが、春秋戦国時代といますから、おおむね 1800 年以上前から発展してきた都市で、非常に長い歴史的遺産が町並みとして残っている、都市文化として残っている、そういうものが発展していく中国経済と融和しながら成長している都市です。南京都市圏としては大体 500 万人くらいの人口を抱えており、福岡県ぐらいの大きさの都市づくりをやっているわけですが、都市中心部には非常に魅力的な都市ができ上がってきています。

以上三つの都市を御紹介させていただきましたが、都市文化と都市の発展は非常に緊密な関係があるのではないかと考えているところです。

それからもう一つ、最近の話題ですが、都市文化を考える上で気候変動が非常に重要な問題だと思っています。特にアジア太平洋の場合には、港湾都市を抱えるたくさんのまちがあって、沿岸部分に都市文化、その遺跡があるわけです。海面上昇との関係で、そういうものが失われるというような推計もありますし、例えばエジプトのアレキサンドリアでは、50 センチの海面上昇で大体 350 億ドルの観光資産が失われるというような推計もありますので、最近のトレンドとしてはこういう気候変動と都市文化ということも考えていく必要があるのではないかと考えております。

最後に、私ども国連ハビタットのアジア太平洋の統括本部を福岡に置いておまして、これは日本にある国連機関の中でも最大規模といえますか、予算的にも最大であり、そういった国連のオフィスが福岡にあるというのは、非常におもしろいことだと思っています。

私どもの下にアジア太平洋の 94 の事務所を持っており、現在2千人を超える職員が、私どもの事業、60 を超える事業を今実施している最中です。その一部として、実際には私どもが住宅を建設するというのは、年間に 20 万戸を超える住宅を建設しているというのが実態であります。その一方でやはり都市連携というようなことを非常に重視しておまして、アジア太平洋都市サミットも含め、都市と都市がさまざまな形でノウハウを共有することによって、都市の発展を促進していくということは非常に重要だと思っています。

今私ども、アジア都市連携センターという、構想ではなくて、私どものオフィスに一応事務局をつくって、地元の企業、マスコミ、また研究機関と協力しながら、アジア太平洋の大学、また都市と文化的な交流も含めて都市連携を図ろうと試みをしているところですので、皆様これから活動していただける上でも、私どもとしても何か御支援をしてみたいと思います。

今日はこれから、文化芸術活動と都市の魅力づくりということで、さまざまな議論がなされると聞いております。フルーツフルな結果が出ますように祈念をいたしまして、私のごあいさつにかえさせていただきます。

(2) 基調講演

アートで都市の未来を切り拓く

ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室長 吉本光宏

今日は、アジア太平洋都市サミット、文化芸術活動による都市の魅力づくりということで、40分ほどお話をさせていただき予定です。

皆さん、きのうは福岡の夜楽しまれたでしょうか。今日が本会議なので、夜は早目に戻られた方もいらっしゃると思いますが、ぜひ今晩は中州という繁華街を楽しんでいただきたいと思います。

この後アジア各都市のプレゼンテーションがありますので、私は今日のテーマに即して日本やヨーロッパの潮流をお話ししたいと思っております。

基調講演ということですが、理論的なことではなく、割と実例といいますか、具体例を写真などを踏まえながら御紹介したいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

まず、日本の文化政策のことをざっと御紹介したいと思います。日本では、文化政策は国とか地方公共団体、あるいは民間企業、財団などが中心となって、文化財の保護、伝統文化の保存、あるいは文化施設の整備、芸術文化の振興等を行ってまいりました。

ただ、日本の文化予算というのは諸外国と比べて決して多くありません。この表には、アジアでは韓国しか出ておりませんが、お隣韓国よりも人口一人当たりでは5分の1というような予算が非常に少ないというのが実情です。どちらかという日本全体としての文化振興の取り組みは、ほかの国々や今日お見えのアジアの諸都市の方々の国に比べても見劣りがするかもしれません。ただそんな中で、日本の文化政策、国際的に共通する部分もありますが、そこには今大きな三つの変化が訪れています。

一つ目は文化政策が対象とする領域が拡大しているということです。ここにありますように、教育面でも芸術文化というのは大きな役割を果たしたり、あるいは高齢者の元気回復や医療の面でもアートが力を発揮する。あるいは犯罪者の更生、外交、環境、さまざまな分野にアートが活用できるということが今日本で行われています。

二つ目のトレンドは、文化政策の担い手が多様化しているということです。国や地方公共団体などの公的団体だけではなく、最近、日本ではアートNPOと呼ばれる民間団体の活躍が非常に活発です。日本は98年にNPO法が施行され、今約4万件近いNPOがあります。これは毎日10件の新しいNPOができていく勘定になるのですが、その中でアートNPOと呼ばれる芸術文化を中心に活動するNPOも2千件を既に超えています。

そうしたNPOが中心になって、新しいタイプの文化施設というものができてきていますし、それから、これはちょっと制度的なことなのですが、公立の文化施設を民間の営利企業が運営するようなことも始まっています。

それから財団法人、社団法人の改正も行われ、文化の担い手は非常に広がってきているというのが、今の日本の状況です。

それから三つ目のトレンド、これは先ほどの野田様のあいさつにもありましたが、都市政策や産業政策とアートや文化が結びついているということです。

クリエイティブシティという言葉が聞かれた方も多いと思います。後で具体例を御紹介しますが、日本あるいはアジア各国でもそうした考え方を取り入れた都市政策が行われており、芸術文化を初めとしたクリエイティブ産業という概念も定着しつつあります。今までは芸術文化というのはお金がかかる、経済的な負担を伴うという存在であったものが、芸術文化が豊かにあることによってさまざまな創造的産業が生まれる、つまりこれからの経済や産業にとっても芸術文化はなくてはならないものだ、という考え方が徐々に定着しています。

今日は都市と文化の話ですので、最初に創造都市、クリエイティブシティの話をしたと思います。

これは、昨年横浜市から私の研究所の方で依頼を受けて調べた世界の創造都市の一覧です。創造都市を政策として掲げている都市、あるいは創造都市の考え方に基づいた政策を展開している都市というのは、世界で 66 都市をカウントしました。もっとあるかもしれません。今日はその中でヨーロッパの都市のことを紹介したいのですが、お手元の資料にある代表的な都市は省略しまして、6 つ具体例を御紹介します。

一つ目は、イギリス東北部にありますニューカッスル・ゲーツヘッドです。この彫刻、皆さん御存じの方もいらっしゃるかもしれません。アントニー・ゴームリーという方のエンジェル・オブ・ザ・ノースという彫刻です。幅が 40 メートル、高さ 20 メートル、総重量 50 トンということにして、御関心のある方いらっしゃったらグーグルアースで検索していただくと、この彫刻を確認することができます。ここは造船や鉄鋼で栄えたまちですが、脱工業化が進んで 80 年代にすっかり都市が衰退して、失業率 15% というような状態になっていました。そのときに、アーツカウンシルとゲーツヘッド市、ニューカッスル市が共同で新しいアートプロジェクトを立ち上げようということで、この巨大な彫刻の計画を立てます。ところが最初は市民が大変な反対をしました。このお化けのような彫刻は嫌だと。ただこれができ上がると大変な話題になり、世界各国からこの彫刻を見に人が訪れるようになりました。それで地元の人たちはこの彫刻を大変愛するようになり、そして誇りに思うようになりました。なぜかと言いますと、鉄鋼業で栄えたまちが、その工業が衰退してまちが衰退したわけですが、その鉄鋼業の技術を使ってそれがアートの作品となってよみがえったわけですが、市民の誇りがこの作品に結集されているという形で、ニューカッスル・ゲーツヘッド市は文化に力を入れるようになりました。

その後、98 年に彫刻ができ、ミレニアム・ブリッジができて、続いてバルチック現代美術センターというのが 2001 年にオープンしています。これも古い工場を活用したもので、外壁を残して、こういうふうに鉄のフレームを組んで、工事中には巨大なパブリックアートを建物ごと設置するというような試みも行われております。最後に新しい文化施設としてできたのがセージ・ゲーツヘッドというコンサートホールです。

この都市はニューズウィーク誌で、世界で最もクリエイティブな 8 都市のひとつに、たしか 2003 年に選ばれております。

次はアムステルダムです。アムステルダムは文化観光でも大変有名で、ゴッホ美術館、オランダ国立美術館、コンセルトヘボウといったコンサートホールが有名ですが、今ここでは大規模な工場をリニューアルした 2 つの文化拠点が注目されています。

一つ目は、もとのガス工場を文化パークにしたもので、市民の憩いの広場になっていますが、古い歴史的建造物がさまざまな文化イベントが行われるスペースとして改修されています。ファッションショーとか、この巨大なガスタンクの中でもさまざまな文化イベントが行われています。つまり、

もとはガス工場だったところが文化施設に転用されているという、まさしく時代の変換を象徴するような建物になっています。

今ごらんいただいておりますのは、NDSMという巨大な造船工場の跡地です。幅 200 メートル、奥行き 100 メートルぐらいの建物ですが、そこをアーティストが市と交渉し、こんな巨大な建物、これはアーティストの代表のエバさんという方ですが、この巨大な空間を勝ち取りました。今この中にアーティストビレッジができています。200 名強のアーティストやクリエイターがここに拠点としてさまざまな作品をつくっている。

ここにはクレーンが残されていますが、将来的にこのクレーンを活用した大規模転換のできる劇場をここにつくるというお話を伺いました。

これはデザイン事務所のオフィスで、こんなバイオ燃料のガソリンスタンドをデザインする人たちも入居しています。

一つだけ屋外にクレーンが残されているのですが、ここには風車を設置して風力発電を試みるというお話でした。

次はドイツのルール地方です。皆さん御存じのようにここは鉄鋼、炭鉱等で栄えた一大工業地帯だったわけですが、それがすっかり衰退し、おびただしい数の産業遺構が残されています。それをさまざまな形で文化的なスペースに転用しようということが始まっています。これらの工場遺構は基本的に壊さないという方針が決められています。

中でも有名なのがツォルフェラインという炭鉱です。この炭鉱は世界一美しいと言われていて、一時期ヨーロッパ最大の生産量を誇りました。バウハウス様式の建物で、実は世界遺産に指定されています。この建物を文化的な催しを行ったり、デザインの拠点にしようということでこの象徴的な建物は今デザイン美術館になっています。ノーマン・フォスターの設計によってさまざまな展示が行われており、工場の配管など残した形でデザインセンターができています。

この左側に見える建物は、このままホテルに転用できないかというプランもあったと伺いました。巨大な倉庫の中にはロシアのアカバコフというアーティストの大規模な作品も展示されています。

奥の建物、改修中なんですけども、一部のれんがの壁がきれいになっておりますが、左側の建物は改修前でガタガタです。つまり、世界遺産ですので、れんがを一つ一つはずして番号を振って、もとおりに組み立てるといって、要するに工場にそれぐらいの価値を見出して文化施設、デザインセンターに転用しようとしています。

これは日本人の建築家の設計した新しいデザイン学校です。

次はビルバオです。これは皆さんもよく御存じだと思います。97 年にニューヨークからグッゲンハイム美術館を誘致しました。この建物が大変な話題になり、世界各国からお客さんが訪れるようになっていきます。

これはアメリカ人のアーティストのジェフ・クーンズの『パピー』という巨大な花のアートワークです。これも今まちのシンボルになっています。

このグッゲンハイム美術館がもたらした経済効果が発表されています。毎年 100 万人の人が訪れ、なおかつその半分以上が外国から来ているということで、莫大な観光収入、経済波及効果をもたらしました。3年間で建設費を回収したとまで言われています。一つの美術館がその都市の経済そのものを支えるというそういう事例がビルバオの例です。

ただ余り知られていないのですが、ビルバオの場合は、美術館だけではなく、大規模な都市再生

事業「ビルバオ大都市圏活性化戦略プラン」が 89 年にできています。それに基づいて新しい空港とか港湾施設の整備とか、さまざま行われる中で、20 個ぐらいの巨大プロジェクトがあるのですが、そのうちの 하나가グッゲンハイム美術館ということです。

続いて、フランスのナントです。こちらは「眠れる森の美女」と 80 年代に呼ばれて、美しい都市だけど活気がないと言われていました。90 年に今の市長のエローさんが当選をし、文化で都市を再生するという公約でさまざまなプロジェクトを始めています。

今ごらんいただいているのは、もとのビスケット工場で、これを劇場や現代美術の場所に転用しました。あわせて、さまざまなクリエイティブなカンパニーを招聘します。そのうちの 하나가ロワイヤル・ド・リュクスという、フランスで最も大規模な大道芸を行うカンパニーです。巨大な工場跡をこうした装置をつくる場所として開放し、このカンパニーは今、世界じゅうで活躍しています。

これはアミアンで、5 年ほど前に行われました大規模な大道芸で、ビルの 3 階建てぐらいの象と少女が 3 日間のアバンチュールを楽しむというものです。そのイベントは世界各国に巡回していて、ロンドンでは少女が 2 階建てバスに乗って町中を遊覧するというも行われました。私はこれをアミアンで見て、横浜市の創造都市の本部長に、ことし横浜市は 150 周年なんですけども、象を呼んでくださいとお願いしました。実は、象じゃなくクモが来たのですが、それは後でお話することにしまして、要するにそれぐらいすばらしい催しでした。何がすばらしいかと言いますと、象が歩行をするのにちょっとした段差があると歩行ができません。ですから、象の歩行障害を解消するために道路工事まで行ってこういうものを行ったそうなんです。つまり、都市のクリエイティビティが問われるような文化的なイベントとなっています。

ナント市は、市の予算の 15%が文化予算という大変な文化の投資をしており、今はこのナント島と工場があったところを、大規模な文化的エリアとして再生しようということが行われています。将来的に、これは高さ 40 メートルぐらいあるそうですが、先ほどの象をつくったカンパニーが同じような木の造形物をつくらうとしています。工場跡はこうした市民の憩いの場に今生まれ変わっております。

最後にちょっと変わった例ですが、ダブリンの例を一つ御紹介したいと思います。皆さん御存じのようにアイルランドは、70 年、80 年代に移民の国と言われてまして、経済的に貧しい国でした。

60 年代に公的住宅がつけられた、バリマンというエリアがあるのですが、その後低所得者が住むようになり、治安が悪化して犯罪の巣窟と言われるように荒廃しました。このようにベニヤ板が窓枠に貼り付けられ、非常に荒廃して警察ですら立ち入れないという場所になっていました。ところが、90 年代、アイルランドは IT に力を入れ、アイリッシュミラクルということで経済が復活します。それで税収が増え、ダブリン市はこのエリアの再開発に着手しました。古い建物がどんどん壊れられて、今新しい建物になっています。そのときのアートプロジェクトも一緒にやろうということになりました。アイルランドはパブリックアートが大変盛んですが、そのときに招聘されたディレクターがアイスリン・プライヤーさんという方で、その方は従来の彫刻を置くだけでは意味がないと考え、さまざまな提案をアーティストに依頼しました。

ボイラー室の煙突が映っていますが、アンドリュー・カーニーさんというアーティストが、ライトアップのプロジェクトを提案しました。最初は市にこれを提案しても、そんな煙突照らしてどうなるんだという、かなり反対があったそうですが、これを実現したところ、地元の人に大変な人気になりました。熱源を供給して住民の生活を支えていたボイラーがライトアップされてシンボルとなってよみがえったとことで、壊されるはずのボイラー施設が解体されず、3 年間継続してこのイベントが

行われたそうです。

ほかにも市民が参加するさまざまなアートイベントが行われていて、これは市民がアーティストと一緒にワークショップで描いた自画像です。同時に内面を、考えていることや気持ちを表現するためのコラージュの作品づくりも行われました。

そのうちの一つの作品がこれですが、”If I was a cartoon, I’d rub myself out.”と、つまり、私もし漫画だったら自分を消し去りたいと、この方は書いています。聞けば彼女は売春を仕事にしていたそうです。ですから、建物、住宅が入れかわるだけじゃなくて、住民が内面を吐露することによって過去の生活に別れを告げて新しい生活を始めたいという、そういう精神的な再生にもアートは寄与しています。

このエリアでは植樹のプロジェクトも行われていて、これもアート作品になっています。植樹に込めた思いが散文になって、あちこちに配置、植樹されています。

今、ヨーロッパの例を少し紹介しましたが、当然、北米、それからアジア太平洋地域でも創造都市的なプロジェクト、試みがたくさん行われており、今日この後、釜山、あるいはシンガポールからも話があるかと思います。

日本ではどうかと言いますと、さまざまな都市が同じような考えに基づいた政策を導入していて、2007年から文化庁も代表的な創造都市を表彰するようになっていきます。

こうした日本の創造都市の動きで私が注目しておりますのは、先ほど御紹介したトレンドの二つ目に関連しますが、NPOがその中心的な役割を担っているということです。

横浜の例、私もお手伝いをしているものですから、それを少し御紹介したいと思います。このように4つの目標、4つのプロジェクトが行われていますが、とりわけNPOと共同して創造的な場所をつくらうというのが横浜市では大変活発に行われ、成功をおさめております。

都心部の歴史的な建造物を改修して劇場スペースにしたり、美術展の場所にしたり、さまざまな拠点が新しく生み出されています。こうした場所をつくる時に、横浜市は、横浜市のつくった文化振興財団ではなくて、わざわざ民間のNPOに提案を求めました。それは従来の行政の文化政策にはない新しいアイデア、新しい発想、クリエイティブな動きを生み出したいということで、民間との協働が行われたわけです。その結果、今までにないさまざまなアクティビティが生み出されています。

これは元結婚式場ですが、それをパフォーミングアーツのけいこ場にしたり、あるいは使われなくなった倉庫にはクリエイティブなデザイン事務所が入ったりということが行われています。

横浜市でも、その結果さまざまな経済効果があったという調査結果が出ています。こうした取り組みは、最近、さらに社会的な課題の解決にアートを使おうというように発展をしていて、初黄・日の出地区というところで3年前にプロジェクトが始まりました。ここは違法飲食街といいますが、不法な売春宿の建ち並ぶエリアでした。そこを神奈川県警と横浜市が共同でクリーンなまちにしようと、エイズ、売春の防止運動や、暴力団がいますから派出所もつくり、まちを安全で安心できる場所にしようという取り組みが行われています。そのうちの一つの売春宿を市が借り受け、そこに防犯事務所をつくり、余った場所をアーティストのためのスタジオに転用をしました。今、中はこのようになっていて、ここでアーティストが寝泊りをして、バンカートのスタジオで作品づくりを行うというようになっております。

こうした点の活動を面に広げようと、昨年、さらに大規模な投資が行われ、高架下にギャラリー、スタジオ、あるいは、これはイッセイ・ミヤケさんのブティックですが、そういうものも出ていただく黄金町バザールが行われました。先ほどのエイズストップの看板は、子どもたちが絵を描くような

ボードになっております。こうした空間が整備されて中にアーティストのつくった作品が展示され、これは紙でつくった果物ですが、そういった物を販売する場所で、このエリア全体が徐々に生まれ変わってきています。

もう一つ、寿地区でも、アートを活用してさまざまなことが行われるようになりました。日本の方は御存じだと思いますが、寿は日本三大ドヤ街と言われる日雇い労働者の住むまちです。非常に特殊な場所として周辺から孤立していたのですが、そこにも地元のNPOが入って、日雇い労働者の簡易宿泊所を一般の方が泊まれるようにリニューアルしています。そのプロジェクトの中心になっているのが、オカベさんという建築家ですが、彼が指導をして簡易宿泊所の屋上を緑の場所に変えたり、それからアーティストに天井画を描いてもらったり、アーティストと一緒にベンチをつくったり、というような活動も行われています。

寿オルタナティブ・ネットワークというNPOがありまして、このエリアにアートを持ち込んで、住民の人たちとさまざまなことをしています。

先ほど、象を呼んでくださいといったのにクモになったというお話をしましたが、今日のレジュメの表紙の写真がそれで、4月に横浜にやってきたラ・マシンというカンパニーです。巨大なクモが海に漂着したというストーリーで始まり、街中を練り歩くというイベントが行われました。彼らはハプニングを大変重要視してほとんど事前広報は行わないので、初日はわずか数千人でしたが、2日目は二、三万人、最後の日に60万人の人がまちに繰り出し、この巨大なクモのパフォーマンスを楽しみました。私も3日間通い続けたのですが、本当に最後はすごい人出になりました。これも実現するには、実は、港湾局、交通局、もうさまざまところと交渉して、実現にはすごく大変な調整が必要だったと聞いています。でも、文化的なセクションだけではなく、例えば警察とか公安とか規制に一番うるさいところも、こういうイベントに巻き込んでいくことで都市全体をクリエイティブな都市に変えていこう、行政組織自体もクリエイティブな組織に変えていこうということを象徴するような催しだったと思います。

2匹のクモがやって来て、1匹は最後に巨大なポンツーンでフランスに帰っていくという設定で、今は1匹が残って、横浜でパフォーマンスをしています。

横浜市は、御存じの方もいらっしゃると思いますが、この創造都市政策を推進してきた中田市長が突然辞任して、8月の末に新しい林市長が誕生しました。タイミングよく9月6日、今月の頭に創造都市に関する大規模な国際会議が行われました。アジアからもたくさんの方に来ていただいたのですが、そこで新市長から、これからの都市にとって、こうした創造都市的な取り組みが非常に重要であるという横浜宣言が発表されました。

こうした動きは横浜だけではなく、全国に広がっていて、先ほど申し上げましたアートNPOというものが非常に重要な役割を果たしています。

2003年に初めて、神戸で全国のアートNPOが集まるフォーラムが開かれました。非常に熱い議論が交わされたのですが、その結果ステイトメントが採択をされました。このステイトメントは、アートが社会の問題解決に大変重要なものであり、芸術文化のための芸術文化ではなく、NPOがそういった活動を推薦していこうという宣言を採択し、以降、毎年全国的なフォーラムを開催しています。

2回目は札幌で行われS-AIRというNPOが主催しました。それから何回目か忘れましたが、青森・弘前、ここもharappaというNPOが主導して、商店街をスタジオやギャラリーにしたりしました。それから、前橋は、日本各地で今非常に問題になっているシャッター商店街の典型的な場所だっ

たのですが、そこに残された古いデパートをこういったアートカフェの場所に転用するというような試みも行われました。このときは、もう亡くなられましたが、文化庁長官の河合さんにも御出席いただいて、NPOと文化庁が共同で日本の都市、文化を活性化しようという議論も行われています。空き店舗にギャラリーがオープンしたり、最後は商店街でダンスイベントが行われたりという催しでした。

ほかにも、東京ではアートネットワーク・ジャパンというNPOがあり、神戸にはCAPというNPOがあります。淡路島では、淡路島アートセンターというNPOが、れんがの建物をアートセンターに転用できないかという検討が始まっています。それから別府、あるいは沖縄という具合に、こうした動きは全国各地に広がっていて、1回目のフォーラム以降、何回か開催された後、これら全部をコーディネートするアンブレラ組織として、アートNPOリンクというNPOが京都にできました。これを東京に置かないというのが非常に重要なポイントで、京都にそういう拠点を私たちはつくりました。以降、フォーラムが継続され、スライドで御紹介したように、全国各地にこうした動きが広がっています。

なぜアートNPOが日本の創造都市を牽引するかと言うと、そこには幾つかの理由があります。行政、地方公共団体につくったいわゆる公立文化施設ではなくて、使われなくなった学校や歴史的建造物をアートセンターに転用をしてNPOが運営しているということがあります。その場合、クリエイティブな活動がそこでどう生み出されるかということに重点が置かれていて、例えば、公演や展覧会といった、芸術の最終商品を消費する形ではなくて生み出すことに重点が置かれています。

それから、こうしたNPOは、アートと市民の間に新しい回路をつくることで、教育にアートを活用したり、福祉にアートを活用したり、市民社会のさまざまな場所にこうしたNPOの活動によってアートが根をおろすということが起こってきています。その結果、市民や行政や民間企業の、その都市に住むあらゆる人たちがクリエイティブな発想で未来の社会を考えていく都市、それこそクリエイティブシティの本質だと思うのですが、そういった都市が生まれています。

もう一つ日本の最近の取り組みを御紹介したいと思います。今は都市の話だったのですが、実は最近では、小さな田舎町でもアートによる地域再生が行われています。

ここでは2つの事例を御紹介します。新潟県にある越後妻有エリア、それから瀬戸内海にある直島、犬島ほか、5つの島を併せた7つの島の話です。

越後妻有アートトリエンナーレというのは、新潟県にある760平方キロメートルのエリアを指していて、人口は8万人弱です。すごく人口が減って、65歳以上の高齢者が非常にふえています。日本の原風景といえるような農村地帯が広がっています。2000年に最初のアートプロジェクトを行い、以降3年ごとに開かれていて、今年もつい先日まで行われていました。

これは写真を見ていただくのが一番いいと思いますので、ざっと写真を流したいと思います。河岸段丘のある田園風景、美しい棚田が広がっています。アジアのいろんなところにもこういう風景が広がっていると思いますが、ここは大変な豪雪地帯で、このエリアに350のアートワークが点在をしています。基本理念は、人間は自然に内包されるというもので、今まで過度に進んだ都市化に対するある種のアンチテーゼも含め、人間の本来あるべき姿を農村で取り直そうというのが、このアートプロジェクトの大きな考え方になっています。

突然田んぼの中に現代美術の作品があらわれます。

このトリエンナーレの象徴的な存在となっているカバコフの作品を少し詳しく紹介します。作品の設置された棚田のオーナーさんはもう歳をとって棚田をやめようと思っていました。そこにカバコ

フが作品をつくるという提案をした際、棚田はある種神聖な場所ですから、最初は猛反対をされました。でも、カバコフさんは日本の農村の歴史と稲作の歴史などを調べて、一編の詩をつくります。その棚田のオーナーさんがその詩を見て作品を受け入れて、今カバコフの作品が恒久設置されています。そのオーナーさんは、もう今棚田を自分では耕さなくなったのですが、関係者のボランティアが棚田を維持しているという、アートの力によってなくなる可能性のあった棚田がよみがえったというようなことが起こっています。

スー・ペドレーという方は、地元の方々と一緒にタペストリーを作って屋外に大規模なスクリーン状の作品を設置しました。つまり、農作業をしていた人たちが、作品をつくるということに参加をしているのです。そのことで地域に対する誇りを取り戻しています。

菊池さんという日本のアーティストは『こころの花』という作品を作りました。この花はビーズでできているのですが、地元の方と一緒に何万本もつくって、山の中に、林の中に溶け込んだ作品になっています。

ドイツ人の作家で、アンティエ・グメルスさんという方の作品、『内なる旅』は林の中にずっと入っていくと非常に神聖な空間が森の中に突如、出現するというような作品です。

もう一つまた別の森の中に入っていくと、昨日福岡アジア文化賞を受賞された蔡国強さんの『ドラゴン・ミュージアム』という作品があります。実はこれはミュージアムになっていて、中に中国人の馬さんの墨をたたえた作品が展示されています。

ほかにも使われなくなった廃屋をアート作品にしたものがいくつもあります。例えばアブラモヴィッチさんの『ドリーム・ハウス』という作品では、中で寝泊りができるようになっています。

それから『繭の家』、あるいは日本人のアーティストが米粒で作った作品も廃屋の中に展示されています。

他にも使われなくなった農家の廃屋をアートで再生して、村の記憶、日本の記憶を現代によみがえらせようというようなことが行われています。

ほかにもこの地域には使われなくなった小学校があり、そこでもたくさんの作品が展示されています。代表例はボルタンスキーという方の作品で、中に入るといろいろ考えさせられるような作品になっています。

前回の、2006年の越後妻有のトリエンナーレは、35万人の人が来たと言われています。8万人の都市、地域に35万人の人が来たわけです。しかも大多数の方が都市からの訪問者でした。今ではその都市とその越後妻有の地域をお互い結びつけて再生させようと、つまり、里親資金という制度が設けられました。都市に住む人たちがいる種の日本の原風景への投資を促し、なおかつ田園風景を維持、回復させようというような試みが行われています。

次に、海の試みを御紹介したいと思います。

来年、瀬戸内国際芸術祭が開かれる予定です。そのテーマは海の復権です。瀬戸内海の香川県と岡山県の向き合うエリアに7つの島がありますが、最初は直島でアートプロジェクトが始まりました。まず3,500人の島にベネッセコーポレーションという日本の民間企業が美術館をつくりました。その後さまざまなプロジェクトがこの島で行われ、去年は犬島という、ここは何と人口が70人しかいない島ですが、そこにもとの精錬所を改修して美術館ができ、いまは豊島というところにまた新しい美術館を作っています。これらのプロジェクトは、すべてベネッセコーポレーションという民間企業が主導しています。来年このエリアの島を全部合わせて瀬戸内のアートフェスティバルが行われる予定です。

直島の地中美術館は安藤忠雄の設計です。屋外に草間彌生の作品、大竹伸朗の作品、宮島達男の作品などが展示されています。

地域、都市の再生ということでこれまでお話ししてきましたが、次に、最初に三つのトレンドということお話しした一つ目、芸術文化がさまざまな領域で力を発揮している、効果を発揮しているという話をしたいと思います。

一つ目が教育です。今日おいでのアジア諸国の国々でも同じようなことが行われていると思いますが、日本では 90 年代後半からアウトリーチというのが盛んになり、学校にアーティストが出向いて、さまざまなクリエイティブなワークショップを行うことで子どもたちの創造力を養うということが大変活発になってきています。地域創造というのは行政組織以外にも、NPO の活動も大変活発で、福岡にもアートサポートふくおかという組織があって、そうした活動をしています。

また福岡では、市のつくった財団もこういう活動をすごく一生懸命やっていると聞きますし、最近新聞で見たのですが、福岡のギンギラ太陽's という劇団が子どもたちと一緒に、博多の演劇ワークショップで、博多のまちの歴史を探索しながらお店の物語をつくるというプロジェクトも行われているということで、子どもたちとアートのかかわりというのは非常に多様になってきています。

こうした活動を、国レベルで最も進めているのがイギリスです。クリエイティブ・パートナーシップというプロジェクトが 2002 年から始まり、子どもたちにさまざまな教育的な効果をもたらしたと言われていました。

2006 年に発表された調査レポートでは、こうした授業を受けた子どもたちの方が、英語や数学、理科の成績がよかったとか、生徒の自信が向上した、それから学習意欲が向上した、さまざまな効果があったということが報告されています。イギリスはこの 5 年間のプロジェクトの後、去年から小・中学校に毎週 5 時間の芸術授業、“Find your talent”（才能発見）というタイトルの授業の導入が決まったと聞いています。

ほかにも犯罪者の更生にダンスが役立つというようなプロジェクトがイギリスでは行われていたりします。それからホームレスがオペラをつくるという、非常に先進的なプロジェクトもあります。それはストリートワイズ・オペラというところで、ホームレスに対してある政治家が「ホームレスというのはオペラを見終わった後、またいで通るような存在だ」という非常に腹立たしい発言をしたことに反発を覚えたマット・ピーコックさんが、ではまたいでいたホームレスをステージに立たせて、その人たちを見てもらおうということでプロジェクトが始まったそうです。

先日来日して、いろいろお話を伺ったのですが、ホームレスがオペラをするということで、音楽のワークショップを日常的に行って、その中から毎年公演をつくりあげるそうです。一つだけおもしろい逸話を聞いたのでお話ししますと、ニューカッスルのホームセンターに通っていたケニーさんという方がいらしたそうです。その方は、アルコール依存症で毎朝センターに来て片隅に座って食事しかしていないような非常におとなしい方だったのですが、その方に音楽のワークショップに参加してもらって、作品づくりにも参加してもらったそうです。そのケニーさんは舞台に立つのではなくて、バックステージを手伝う仕事をされたのですが、本番の公演になると、ホームレスの方々にチケットがプレゼントされるのです。それで、ケニーさんはホームレスになって以来、10 年も 20 年も会っていない娘さんたちにそのチケットを送ることにしました。つまり 10 年ぶりに親子の対面が実現するのです。なおかつ、そのうちの一人の娘さんは結婚して子どもができて一緒にオペラを観にやって来たんですね。ですので、ホームレスがオペラに取り組むことによって、孫との対面が実現する。音楽活動をやることで、参加者の自尊心が回復される。その結果ホームレスだった人たちが

実際仕事を始めようとか、そういった具体的な成果まで生まれていると聞きました。

先日来日された際には、釜が崎と寿町でワークショップも行ってもらいました。

今までいろいろ話してきましたが、都市と文化の関係を考えるときに、切り口はいろいろあると思います。ただ、重要なのは、今までの文化政策の考え方を大きく転換する必要があるということです。従来の芸術文化そのものを振興したり、文化財を保存したりする文化政策、これも大変重要ですが、それを狭い意味の文化政策とすると、今日いろいろお話ししましたような、教育や福祉、あるいは地域再生、産業振興、こういうものにも資する文化政策というものも、これからは重要になるだろう、そういう視点が重要になるだろうと思います。

それを図式化したのですが、従来の文化政策というのが中心にあったとすると、そこから他の領域に発展をして、教育や福祉、医療、健康といった公共行政施策の中に文化、芸術というものが、さまざまな効果を発揮する。あるいは産業や経済振興、これは営利企業、民間企業への連携ということになると思いますが、そこにも文化からさまざまな種が生み出される。そしてそれらを総合する形でまちづくりや地域再生というものが芸術文化をコアにして生まれてくる。そこで重要なのは、この真ん中の従来の文化政策に投資したものがさまざまに波及をしていくという考え方です。

それを象徴的な二つのフレーズで最後まとめてみました。今まで、どちらかというと芸術文化は社会的に意義があるので、国や民間企業も一緒になってそれを支えましよう、つまり芸術文化は支援や保護をされる対象だったわけです。しかし、今お話ししましたように、芸術文化、つまりアートが一つの起点となって、さまざまな社会の改革やイノベーションが起こってくる時代になっています。

先ほどホームレスの話を少ししましたが、もしホームレスの方がホームレスのままですと、そのホームレスの方をケアするのに社会的なコストがかかるわけです。しかし、音楽活動をして、そのホームレスが働き始めると、彼らは経済的にプラスの活動をするようになるわけです。つまり同じ投資をしても、負が起こらないようにするのではなくて、アートに投資することによって、負をプラスに変えていける、それがイノベーションという考え方だと思うのですが、都市と芸術文化の関係を考える時にはそうしたことが極めて重要ではないかと思います。この会議のテーマは文化芸術活動による都市の魅力づくりというテーマになっています。主催者には大変申しわけないですが、この魅力づくりという表現は非常に手ぬるいと思います。芸術文化による投資がなければ、こらからの都市は生き残れない、そういう時代がやってきているのではないかと思います。

今日はヨーロッパの例を御紹介しましたが、アジア太平洋地域において、またアジア太平洋地域ならではの独自の考え方、独自のポリシーに沿って新しい形の文化芸術による都市の活性化がこれから生まれてきてほしいと思っています。

(3) 福岡市発表

①文化芸術による、元気で、多彩な人々が集う街を目指して

福岡市市民局文化部文化振興課 課長 中嶋裕一

福岡市の文化芸術振興の取り組みとして、福岡市の特徴や歴史、文化芸術関連の行政の体制、主な分野での取り組み、今後の展開などについて説明いたします。

前日に行政や企業、市民・NPOなどのさまざまな施設を見ていただいたと思いますが、文化芸術の主体としては、行政、企業、市民・NPOなどがあり、それぞれ独自に取り組んでいるものもありますし、連携をとりながら取り組んでいるものもあります。

このプレゼンテーションでは、行政が実施していることを中心に説明をさせていただきます。

まず、福岡市の特徴と歴史などですが、福岡市と周辺の市町村を含めた福岡都市圏の人口は約 237 万人で、東京、大阪、名古屋に次いで、4 番目に人口が多い地域です。福岡市は九州・西日本の中心都市です。

地域の特徴としては、「芸どころ博多」と呼ばれており、芸事や、祭が好きな市民が多く、昔から市民ベースで文化活動が盛んな地域です。また、文化施設としては、音楽や演劇ができるようなホールが市内に約 60 施設あります。それと、映画館については約 40 スクリーンということで、人口当たりでは全国一位です。このように企業ベースで多くの施設などが整備をされています。

市民や企業などにより、さまざまな文化活動が行われていますが、行政としては主に市民や企業の文化活動の支援や、活動の補完をするよう取り組みを中心に行っています。例えば、商業ベースでは成立しにくい、高い芸術性や、将来性があるような先駆的なものや、伝統的なものでその普及や将来への継承が必要なものについての後援や、ワークショップの開催などを行っています。それと、文化団体や市民などのさまざまな文化活動への資金的な支援や、広報等の支援を行っています。それと、民間ベースでは成立しづらい大規模な文化施設については、行政が中心になって設置を行っているところです。

次に、文化芸術関連の行政の体制についてですが、福岡市役所では、主に市民局文化部、教育委員会、経済振興局、あと総務企画局の国際部などが、文化芸術の振興にかかわっています。福岡市全体の文化芸術の振興に関する総合的な企画調整を市民局の文化部で行っています。また、文化芸術関連の外郭団体として、演劇などの舞台を提供している株式会社博多座や、文化芸術の振興に関する具体的な事業を実施している福岡市文化芸術振興財団があります。これらが福岡市役所の各部門と連携を図りながら、福岡市の文化芸術の振興を図っています。

次に、主な分野での取り組みについて、説明いたします。

最初に、音楽、まずクラシック系につきましては、民間だけでは運営が難しい面もありますので、九州唯一のプロオーケストラの九州交響楽団や、18 世紀以前の西洋音楽を演奏する福岡古楽音楽祭をやっていますが、これに対し、資金的な支援や、コンサート開催への協力などを行っているところです。ポップス系については、民間サイドでの活動が充実しており、さまざまなコンサートやイベントが行われています。行政としては、ストリートパフォーマンス事業として、街角や公園など公共的空間を音楽などのパフォーマンスの発表の場として提供する事業ですとか、ミュージックシ

ティ天神、これについては、街角にステージを設置して、あとライブハウス等複数の会場で、プロ、アマのミュージシャンがライブを行うイベントですが、そのようなイベントを通して若者への発表の場の提供や、イベントを通じたまちのにぎわいづくり等を行っているところです。音楽系の施設等としては、商業ベースでは採算が難しい、音楽・演劇練習場。こちらのアクロスにありますシンフォニーホールなどのクラシックのホール、市民会館やサンパレスなどの大規模なホールなどを設置しているところです。上の左の写真が、アクロスシンフォニーホールです。クラシック系のホールです。上の右側の写真が、九州で唯一のプロオーケストラ、九州交響楽団です。下の写真が、ミュージックシティ天神の様子の写真です。

次に、演劇、ダンスについてですが、演劇、ダンス分野については、ホールなど民間で一定程度の施設が整備されて、公演などもなされています。ただし、音楽ほどの一般性がないと思っているので、さらなる振興が必要な分野だと考えています。行政は民間と連携して、コンテンポラリーダンスの公演や、演劇フェスティバルなどイベントの開催を行っているところ、演劇やダンスの振興を図っているところです。演劇、ダンス系の施設としては、先ほども御説明しましたが、音楽演劇練習場や、市民会館、サンパレスなどの大型のホールを設置しているところです。また、福岡市の特徴的な施設として、博多座という劇場があります。これは、後ほど説明いたします。上の左の写真が、今年行いましたコンテンポラリーダンスの公演の様子です。アジアの各国からもダンサーを招聘し、4つの作品を上演しました。上の右側の写真が、演劇フェスティバルの様子で、民間のホールなどと連携して、九州の劇団など13公演を行っています。下の左側の写真が市民会館です。1963年に福岡市が設置して、市民や、プロなどさまざまなアーティストによって幅広く利用されています。下の真ん中と右側の写真が、音楽演劇練習場です。市内に3施設設置しています。

次に、福岡市の特徴的な施設である博多座について説明いたします。博多座は、歌舞伎、ミュージカル、芝居など多彩な演劇を常時公演することにより、福岡市のみならず九州一円の演劇文化の振興を図るために設置した劇場で、年間約50万人の観客を動員しています。建物については福岡市が建設しており、管理運営は、福岡市の外郭団体、株式会社博多座という会社を設立して運営を行っています。下の右側の写真になりますが、毎年6月に、歌舞伎独自の伝統行事である船乗り込みという行事も実施しています。約3万人という多くの観客を集めているところです。また、通常は商業演劇を公演していますが、毎年12月の1カ月間については、市民檜舞台の月ということで、市民の演劇等の発表の場として開放するなど、演劇文化の振興を図っているところです。

次に、映像分野についてですが、一つは、福岡市と周辺の19市町と合同で映画やドラマ、CMなどの撮影の支援を行う「福岡フィルムコミッション」を設置しています。こちらの方で年間約50本のCMや、映画などの撮影の支援を行っています。また、1990年から「アジアフォーカス福岡・国際映画祭」を開催していて、市民がアジア各国の映像文化に触れる機会を提供しています。こちらにつきましては、本日から開催されます。こちらの映画祭で使用したフィルムについては、福岡市総合図書館の「シネラ」という映像ホールに収蔵しています。特集などを組んで放映をしているところです。上の写真が、今年の「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」で上映される映画です。今年度は、9月18日から10日間の間開催します。アジア16カ国・地域の映画25作品を上映します。下の左の写真が、福岡市総合図書館で、こちらの中にある映像ホールに映画祭で使用したフィルム等を収蔵しています。下の右側の写真が、フィルムコミッションの様子で、撮影の支援をしています。

次に美術館や博物館などについてですが、福岡市に、公立の美術館、博物館としては、昨日見ていただいた福岡アジア美術館のほか、福岡市美術館、福岡市博物館があります。それぞれ多くの作

品を収蔵・展示しています。また、民間企業などと連携して、企画展なども実施しています。上の左の写真が福岡市美術館です。上の右の写真が、昨日見ていただいた福岡アジア美術館です。下の写真が福岡市博物館です。

次に伝統文化・伝統産業についてですが、日本には、伝統文化として、文楽、能、華道をはじめさまざまなものがありますが、福岡市では、文楽や能を体験・鑑賞するワークショップや、福岡市華道展などを開催しています。また、福岡には、博多人形、博多織などの伝統民芸品があります。これらについては、文化振興というよりも産業振興の観点から、後継者育成や、新製品の開発、販路の開拓などを支援しているところです。上の写真の左が文楽のレクチャーの様子で、小学校などで、文楽の説明や実演を行っているところです。上の右の写真が、能のワークショップを行っている様子です。こちらについては、学校や公民館などで子どもに体験していただいています。下の左の写真が華道展の様子です。右の写真が伝統工芸の写真です。

その他の特徴的な取り組みとして、2006年に福岡ゲーム産業振興機構をゲーム制作会社や九州大学、福岡市などで設立して、ゲーム産業の振興を図っているところです。今年から「福岡アジアコレクション」を、ファッション業界や福岡商工会議所、福岡県、福岡市などで共同で開催しています。これらの取り組みについては、産業振興局が中心になって行っていて、文化振興というよりも産業振興の観点から取り組んでいるところです。

次に、福岡市の文化振興の今後の展開についてですが、昨年12月に「福岡市文化芸術振興ビジョン」を策定しています。今後はこれをベースの福岡市の文化芸術施策を実施していくこととしています。基本理念を「全ての人々にとっての文化芸術、未来の向けての文化芸術」としています。この基本理念に基づいて、子どもから高齢者まで、性別や障害の有無にかかわらず、すべての人々が文化芸術に触れて、担い手となれるように政策を展開したいと考えています。特徴的な内容としては、未来の担い手である子どもたちへの重点的な取り組みや、文化芸術を支える若者の創造活動の支援ということで、子どもたちや、若者への活動に対しての支援を中心に取り組んでいく必要があるのかなと考えております。それと、文化芸術を担う多様な主体との連携・協働ということで、先ほどからお話があるようなNPO、市民、アーティスト、企業等々と連携・協働を図っていく必要があると考えています。

最後に、現在行っております子どもたちへの取り組みをご紹介します。左の写真が、「芸術交流宅配便」という事業で、国内外の著名なアーティストなどを招いて、学校や公民館などと連携して、市民の身近な場である地域で文化芸術に触れて、そのおもしろさや楽しさを実感できるワークショップやレクチャーなどを行っています。右側の写真が、「子ども達芸術活動」事業で、主に学校で、演劇やダンス、音楽などのワークショップを行っています。

以上、簡単ではございますが、福岡市の文化芸術振興策について御説明いたしました。

②トラベラーズプロジェクト紹介

TRAVELERS PROJECT 主宰 野田恒雄

最初に、福岡市としてのターンでプレゼンテーションさせていただくのですが、これから発表する僕の活動は、行政からの支援を受けているわけではなくて、民間ベースでやっています。NPO、

NGOでもありません。トラベラーズプロジェクトというプロジェクトをしています。今日は時間が数分しかありませんので、ファイルにあるこちらの資料を基本的にお読みいただいて、それに付随する情報をお話ししようと考えております。トラベラーズプロジェクトは場づくりを目的とするプロジェクトです。常に考えているのが、人、こと、物、金ということ、僕は建築のデザインが本業ですが、デザインをするという観点から右側のようなことを生み出すことをいつも意識しています。

今日は、民間がつくる公共の場ということをテーマに少しお話しします。最近むしろ、公共側から民間にアートの振興をゆだねていくという流れがありますが、できればもう一歩先の民間が公共の場をつくっていくというようなことをできればいいのではないかなと考えています。民間と公共というのは切り離されて、今まで左側のように考えられてきましたが、本来は民間と民間が重なるところに公共が生まれるべきだと考えています。それを建物として考えた場合、これまで左側のように閉じられた箱だったわけですが、右側のように開放される場へと、公共化されていく、半公共空間と建築がなっていけばいいのではないかと考えています。

また、その際に、行政とどういう関係を築いていくかということも考えています。お配りした手元にある資料と順番が違いますので、こちらを見ていただきたいのですが、これまでは左側のように、民間に対して行政があれしてくれ、これしてくれと、民間は行政に対してああしてほしい、こうしてほしいということ、お互い自己主張し合っていたわけですが、本来はこれから右側のように、言われなくても民間は民間の役割を果たす、行政は行政の役割を果たすという補完する関係であることが理想的です。

次に、そんな関係をベースに考えましたら、このように行政と民間の役割というのはもう少しはっきりしてきまして、お互いが一つのことを目指して役割分担してやるべきことをやっていくという関係が理想的かなと思います。そういう段階はどういったときに達成可能かと言うと、実は、僕は福岡も達成可能だと考えておりました、これは僕が勝手に考えたまちと文化のすごろくです。文化都市を目指すという段階から仮に行政が始まると、税金等に行政主導が始まり、次に長期的文化事業を実施。横浜市なんかはこのあたりの段階かなと思います。それでやっと初めて民間の意識が啓蒙されて、民間の意識が変化します。民間主導になりますが、福岡はこの段階だと思います。次に行政の役割が初めて変化して、先駆的行政の構築、そして文化都市の誕生ということが一つのゴールとしてあり得るのではないかと。これが福岡市の場合は、意外とこのことを意識されていない方が多いのではないかと思います。どちらかというと、横浜や金沢に対し遅れをとっていると思われるかもしれませんが、行政はむしろ横浜と金沢、これから面する問題に対して、もうぶち当たっている。福岡はこれに対して先駆的な一手が打てれば、先例的な事例になっていく行政になると思います。

ここから、これをベースに僕の活動をお話しします。これはもう今年の3月に終了しているプロジェクトですが、昨日ご覧いただいたプロジェクトの1つ前です。築50年の古いアパートに20組ほどのいろんな業種の人たちが入居していました。これがざっと入居メンバーです。アパートとしてはこういうぼろぼろのアパートだったのですが、そこを各メンバーが思い思いに内装をして、このようにアトリエができていったわけです。そのときにまちに対してどういう関係を築いていったかということですが、まず掃除への参加から始めました。僕はまちづくりとか地域活性化をほとんど意識していないのですが、むしろ一地域住民としてどのような、一年生としてどのような姿勢があり得るべきかということ、多少は意識しています。そうすると、掃除に参加していたら地域のイベントを企画してほしいという話をいただいて、落語の寄席を開催したり、これは福岡市の企画調整課の方たちがされていましたが、川辺のイベントに御協力させていただいたりしています。

また、まちに投げかけるということで、今回アジアアートトリエンナーレに参加しています浅井裕介という作家を呼んで、落書きとアートということをして、落書きに対する一般の方の意識をもう少し変えようというような動きをしたこともあります。

また、行事をつくるということで、このように七夕祭りなど、地域にありそうでなかったような行事をちょっとやってみたりすることで、地域との関係を緩やかにつないでいったり、屋上のイベントをしたりしています。そうするとたくさんの方に見に来ていただいて、余談ですが、これがそのまま漫画になったりもしています。

次に、きのう見に来ていただいた紺屋 2023 の御紹介です。きのうもお話しましたので、この未来の雑居ビルに関しては、お手元の資料をごらんください。時間の雑居ということはこのプロジェクトでは意識しています。これはつまり長期的な、2023 年までという時間の枠組みをみずから設定しているわけですが、それに対してどういった時間のデザインができるかということが大変重要になってきて、そんな中で、このように3年契約、1年契約のオフィス、1日から半年まで滞在できるステイ、ギャラリーもしくは1階にレストランがあるんですが、そこに滞在する2時間のお客さんまで、15年間の中にいろいろな時間のスパンのものを組み込んでいくことで、新陳代謝を促していくわけです。

建物はこんな感じです。今もうこのローソンはありません。このように通路だったところを、僕は建築のデザインが専門ですのでこのように変えまして、リデュースしたところがレストランに今なっています。このレストランはきのうも御紹介しましたが、市内もしくは九州県内のデザイナーたちにかかわってもらって、料理だけでなく家具やプロダクトまですべて買って帰ってもらえるというレストランです。こういうギャラリーになっていまして、アパレルのブランドの、これはちょっと有名ブランドですが、展示会が行われたり、シンポジウムが行われたりしています。また、このような部屋だったところがこのようなオフィスになって今使われていたり、これは短期滞在の部屋ですが、右側は黒板になっていて、泊まった人が思い思いに書き残していきます。

まちに人材を呼ぶということを少し意識して、昨年年末に、ベルリンから若手のアーティストを招聘し、3カ月福岡に滞在、ここに滞在してもらいながらアート作家活動をしてもらいました。こないだサマースクールという教育プログラムをしました。全国から約30名の男女が集まって3日間合宿しながら、それぞれのディレクターから授業を受けて、最後にこういう発表をしています。以上です。ありがとうございました。

③福岡市における芸術文化に関する状況

アートサポートふくおか 代表 古賀弥生

私はアートサポートふくおかという団体の代表を務めております。アートサポートふくおかは、民間の非営利組織で、だれもが芸術文化を楽しめる環境づくりを目的に活動しております。

今日、皆さんのお手元にファイルと別にこの1枚の紙で資料をお配りいただいております。簡単ですが、そちらを後ほどご覧いただきたいと思っております。私どもがやっております活動は、主に学校にアーティストを派遣して、ワークショップ型の授業を行うコーディネートや、文化政策に関するセミナーなどの開催です。

本日は、私どもアートサポートふくおかの活動紹介ではなく、少し引いた立場で、私は文化政策、

地域における文化政策を研究する立場でもありますので、そうした立場から福岡市における芸術文化に関する状況について述べさせていただきたいと思います。

福岡市における芸術文化を通じた都市の活性化、あるいはその文化に関する取り組みについては、今、行政と民間のそれぞれの立場から御報告がありました。この御報告でまだ触れられていないNPOあるいは企業の活動というのもあり、大変大きな役割を果たしている部分があると思います。

例えば、市民、あるいはNPOの活動については、この会議の前夜祭ということで、アートライブが行われ、参加された方もいらっしゃるかもしれませんが、工房まるさんという、福祉でアートをつないでいらっしゃる団体が福岡市内にはあります。本日皆さんがつけていらっしゃる名札のデザインや、バッグのデザインも手がけられているということで、障害のある方がデザイン、アートを通じて社会とつながるといようなことの活動をサポートしている団体もありますし、あるいは、芸術や文化を通じて子供の豊かな育ちを支援するNPOや、私どものように学校教育と芸術をつなぐというNPOなど、さまざまあります。もちろん芸術、文化そのものの活性化というものを目指すNPOもあります。また、NPOという形ではなく、アーティスト個人や、市民の方個人がプロジェクトを行っている場合もあり、非常に多様に展開されています。

それから企業についても、昨日イムズの御見学をさせていただいているわけですが、それ以外にも、例えば本日基調講演していただきました吉本さんのご研究にもあるのですが、芸術、デザイン、広告、出版などのクリエイティブインダストリー、創造産業の分野において、福岡市は事業所数、従業者数ともに集積の度合いがかなり高いと、特に広告、映画、映像、写真、出版などの集積度が高いということが指摘されています。

また、福岡市の御報告にありましたミュージックシティ天神などが一つの例ですが、直接的に自社の利益になるということではないかもしれませんが、企業が立地する地域をアートイベントなどで活性化することで、間接的にメリットを享受するというような形で、企業が文化とかかわるといような活動もあります。

また、もちろん、直接的な見返りを期待しない企業メセナ活動というの、福岡市内の企業も実施されているところがあります。こうしたさまざまな、事例を一つ一つあげることが今日ではできないのですが、たくさん活動が官民ともに行われている福岡市ですが、現状はそれぞれがばらばらに活動されていて、点として存在していると思います。これは本日の会議のテーマになっているような、文化や芸術を通じて都市の魅力づくりをしていく、活性化していくということを考えるならば、次の3点が必要ではないかなというふうに考えています。

まず1点目は、都市政策の中に芸術文化の役割を明確に位置づけて、総合的な政策を展開するブランドデザインが必要ではないかということです。例えば、福岡市の御報告の中にありましたが、幾つもの部署が芸術文化にかかわる施策を所管しているわけですが、それらを横断して議論する場というのは、果たしてあるのだろうか、お話を伺って思っていました。また、民間の活動も含めて、都市全体としてどのように文化芸術とのかかわりというものを考えていくのか、という大きな位置づけというものはちょっと見えてこないかなあという感じがいたします。

現在は、それぞれいろんな活動が行われている状況というのを総合的に把握している人、あるいは機関というのはいまのところはないかなと思います。さまざまな活動が行われている、それが個々に、ばらばらにやられているというのが、いいところでもあり、ひょっとしたら悪いところでもあるかもしれません。これを都市の活性化につなげるためには、ある程度全体でどんな活動がされているのかを把握して、必要な場合に必要の人と機関とをつないでいくような連携させるようなこ

とも必要ではないかと思います。

次に2点目ですが、ある具体的な事柄について関心を同じくする人同士が集まるようなプロジェクトベースの連携・協働の場がたくさんできること、これが大事ではないかなと思います。例えば先ほどの野田さんの御報告にありましたような、紺屋 2023 のような、ああいった場、野田さんはもしかしたらアートセンターというような意味合いでなさっているわけではないのかもしれませんが、非常におもしろい活動につながっていく、可能性を感じる場になっているかと思います。いろんな関心を持つ、その共通の関心を持つ人たちが集まる場というのが、大きくなくていいので、小さいものがたくさんまちの中に出現すること、これが大事ではないかなと思います。

決して芸術文化と都市にかかわる関係者が一堂に集まって会議をするというようなイメージではなくて、アーティスト、市民、NPO、行政、企業などさまざまな立場の人が共通の関心を持って集まってくるといような場が欲しいなと思います。ただ、連携とか協働というのは、今大きなテーマになっている言葉ではあるのですが、これはあくまで手段であって目的ではありませんので、それぞれが個々に動くことで自由な展開ができていいという場合もあるかもしれません。福岡市はもしかしたら自由に動くことで力を発揮できるタイプの方も多くいらっしゃるかもしれないので、あくまで必要な時に連携するというスタンスがいいのかなと思います。また、1点目で触れましたグランドデザインもそういう場が出てくるのがいいのかなと、さまざまな考え方が出てきて、その集約ができるかいいかと思います。

さて、3点目ですが、芸術文化を都市の魅力づくりに生かしていくというと、どうしても経済の活性化という話になりがちなのですが、私は、芸術文化は人を幸せにするものだと思っています。経済以外の福祉、医療、教育、子育て等の領域でも大きな力を発揮します。現状は、そういった部分は、福岡においては、市民、NPOの取り組みというのが行われていると思いますが、もっと大きな力を発揮できる可能性はあると思います。そこで重要になるのが、こういった領域で活動できる人材の育成ではないかということも3点目として挙げたいと思います。

最後になりますが、今お話ししましたことは芸術文化を通じて地域を振興していくということですが、もちろんその前提として芸術文化そのもののパワーが元気でないと芸術文化をほかの分野に生かすこともできないかと思います。芸術家の活動が展開しやすい都市であることというのが、芸術文化を通じた地域振興に必須だということもつけ加えておきたいと思います。

④福岡市の発表に対する質問・意見

(i) 上海市外事弁公室総合業務処副処長 陳 智輝

先ほどの3名の方々、いわゆる民間、それから行政の芸術活動を通して、その魅力を高め、未来のビジョンを描くということをお話ししていただきました。それから、古賀さんもそうしたこういう協力を通して、市民の文化へのサポート、それから支援についても非常に詳しい御説明がありました。非常に示唆に富んだものでした。福岡市の文化芸術の振興、その仕事を通して、たくさん成果が得られたかと思います。昨日の見学を通して、非常に御市では文化的な雰囲気濃厚で、九州地域の最大の都市であるだけでなく、非常にビジネスの雰囲気もあり、ビジネスも盛んであるということを感じました。それは非常に文化的、芸術的にも非常に楽しい都市であると、皆様が愛してくれることでたくさんの方ができるといことを感じました。私は上海から来ましたので、上海の取り組みを簡単

に紹介したいと思います。

上海は文化芸術産業をいわゆる都市のソフトパワーというふうに位置づけております。この近年たくさんのことをしてまいりましたけれども、そのクリエイティブな芸術パークの知名度も上がってきていて、御存じのようにM50、1930とか、858とか、そういうのがありました。上海の文化財産権取引所も設立されました。上海文化芸術の市場のサポートをしています。上海芸術の行政部門としても重視しておりまして、産業の発展のサポートをしてくれています。何しろさらに高めていくためには、福岡市の経験に学びたくさん勉強したいと思います。御在席の皆様、各都市の代表の方々からたくさん学んで持ち帰りたいと思っています。

今回のアジア太平洋都市サミット、この会議を通して、交流と勉強のプラットフォームを提供してくださったことに感謝いたします。

来年は上海で博覧会が、よりよい都市、よりよい生活というテーマのもとで開催されます。福岡市の行政関係者、それから市民の方々にもお祝いしたいと思います。皆様来年上海にお越しいただきたいと思っています。ありがとうございます。

(ii)宮崎市市民部文化スポーツ課 主任主事 黒木大徳

私の方からは質問ではなくて、感想を申し上げたいと思います。私の地元宮崎の話で恐縮ですが、現在、10月1日のオープンに向けて新しい文化施設を整備しています。これは宮崎アートセンターという名称で、民間が中心市街地につくり上げたビルの3階から6階までを本市が買い取り、これをアートスペース、または創作アトリエとして利用する予定となっています。この運営方法としては、二つのNPO法人を指定管理者として指定し、さまざまな自主事業を展開、中心として中心市街地の文化芸術によるコミュニティの再生を目指すものです。

そういった中で、先ほどの福岡の3名の方のお話は、これからの私ども宮崎アートセンターの円滑な運営を進めていく上で、民間やNPOの方の文化芸術の支援や、または行政との役割分担という視点でのヒントやアドバイスの要素がふんだんに盛り込まれていた内容となっていました。

今後、所管する課として、また、担当者として大いに参考にさせていただきたいと感じたところです。ありがとうございました。

(4) 釜山広域市発表

①釜山広域市文化観光政策

釜山広域市文化体育観光局文化芸術課 芸術振興係長 崔同煥

皆さん、こんにちは。私は人口 350 万人のまち釜山広域市からまいりました。

まず、文化という言葉について考えてみたいと思います。ある社会、または国の生活様式のすべてを表すものであり、その社会の構成員のアイデンティティ、そして一体感をつくるに当たって大変重要な役割をしています。文化産業は技術と組み合わせられて、高い付加価値を持つ未来志向的な産業に進化しています。また、新しい価値をつくり上げる国家の競争力の根幹となりつつあります。このような流れにあわせて、釜山の文化観光の現状と取り組みを御紹介します。また、都市の持つ観光資源で文化芸術はいかに育成できるかどうかについて御紹介いたします。

昨今の観光を取り巻くトレンドを見てみますと、世界の文化都市は今や、都市環境と都市発展の戦略としての文化施設、またそのプログラムの変化を追及しています。タイプ別に見てみますと、住民のレジャー、福祉向上のための生活密着型、機能複合型、都市マーケティング型、また、きのう拝見しました紺屋 2023 のように、廃屋を利用した廃空間再生型というふうに見ることができます。

また、国内外の主要な都市を見ますと、韓国の首都ソウルの場合、創意文化都市ソウルの創造を宣言しました。三つの分野にわたって 10 の中心課題と 148 の個別事業を提示しています。また、韓国の光州は、アジア文化中心都市づくりを目標に掲げ、2004 年から 2 兆円以上の財源を投入して、10 大戦略を進めています。海外の事例を見ますと、ニューヨークは創作空間の提供、財政上の優遇など、作り手に好まれる都市環境をつくる、ニューヨークには芸術があるという戦略を進めています。

また、北京の場合は、第 11 次 5 カ年計画のもと、文化創造産業 5 大特区を指定しています。そのほか、ビルバオ、東京、香港、シンガポールなども同じような事業を進めておりますし、また、釜山も新しい文化がすなわち新しい産業であるとの認識のもと、さまざまな文化コンテンツとプログラムの開発を進めるべきだと示唆しています。

観光産業は御存じのとおり、特段の雇用がなくとも成長が望める産業です。高い付加価値があり、また、観光収入に大きく依存している国もたくさんあります。国際観光産業は、2010 年、世界の GDP の 10.9%、そして世界総雇用の 8.6% を占めております。2020 年まで国際観光客の数は 16 億人に達するだろうとの見通しです。また、アジア太平洋地域は世界 2 大観光市場であります。2020 年まで 4 億 2,000 万人が訪問するだろうとの見通しです。2008 年、韓国を訪れた外国人 689 万人を見ても、アジア地域の方が 403 万人で最も多く、次アメリカ、ヨーロッパの順です。海外からの観光客が 2,000 万人を超える時代を迎えて活気にあふれていますが、逆に海外に出ていく観光客も多いので、収支は赤字を免じられません。釜山を訪れる外国のお客様は、対 2007 年比、8.8% 増で、着実に増加はしているのですが、北東アジア地域からの観光客がほとんどなので、戦略的にこの観光客の誘致対象地域を拡大しなければなりません。

では、次に、釜山市の文化観光の実態と政策について申し上げます。釜山地域の観光資源において、釜山は伝統文化、そしてこのダイナミックな釜山気質というものを体験し、交流できるきっかけ

が少ないという評価もありますし、また、不当に法外な料金をふっかけるという、そういうマイナス的な口コミもありまして、マイナスイメージが広がり、訪問を避けられるようになりました。新規の観光市場の確保は難しいという懸念もあります。2008年、釜山を訪れた外国人181万7,000人ですが、前年度対比、日本人が8.8%増で、国外の観光客の増加率6.9%に比べて、日本の方はたくさんいらっしゃいますが、ほとんどが日本、中国など地理的に近い国が多いので、より特化された広報活動が望まれます。釜山市の文化観光政策の成功いかんは、釜山の持っているものをいかにクリエイティブに活用するかにかかっています。

釜山の文化と観光の強み、弱みがいかなるものなのかよく知る必要があります、まず、釜山文化のSWOT分析においては、国際的イベントを開催できるまちだという市民のプライド、そして国際化時代に見合う情報交流の中心地という強みがあります。しかし、国際規模の文化的インフラが不足しており、文化産業の基盤も脆弱であるという弱点もあります。また、文化芸術のニーズの増大と地方自治制度の施行により、地域独自の発展の可能性は高いのですが、首都圏との格差がひろがり、コンテンツの開発及び人材育成のための環境が不備であるという要素もあります。観光分野における、強みとして、山、川、海などの観光資源と、空港、鉄道、船などさまざまな交通手段は持っているものの、施設が老朽化して利用が不便であり、観光インフラも不足しているという脆弱点もあります。また、政府と自治体、釜山市による観光産業の育成政策の樹立というきっかけづくりはありますが、ほかの国との調整は難しいという難点もあります。

釜山の文化芸術の主な取り組みとして、私が文化芸術振興を担当していますが、まず、文学展示、公演などをして、アーティストたちの基盤づくりとなる文化芸術創作活動をサポートすることができます。また、ダンス、演劇、美術など特色ある地域の文化の育成及び伝承をしていく上でサポートする必要があります。

さらに文化芸術団体及び地方の文化センター活動をサポートしたり、文化芸術団体などがひとり立ちできる力をはぐくみ、青少年芸術祭、文化祭、文化学校を運営し、釜山市は2010年度文化センターをリモデリングし、市立芸術団の大衆公演を行うなど、文化芸術公演のレベルアップを図る予定です。

釜山市の主なイベントとしては、毎年開催している釜山初日の出フェスティバル、釜山海のフェスティバル、朝鮮通信使、韓日文化交流事業、釜山国際演劇祭など、国際的な文化イベントを集中的に育成し、文化水準の向上と観光効果までおさめられる文化イベントを推し進めています。

また、釜山市が重点的に開催している釜山国際映画祭は、今年の場合、新型インフルエンザによって取り消される予定でしたが、世界的に知られたイベントであるだけに、対策を講じて、計画どおり11月には開催する予定となっています。

次に、釜山市の文化芸術イベントの観光資源化についてです。釜山の文化産業を振興する上で、さまざまな文化資源がありますが、これが必ずしも観光商品へと結びついていないのが問題点であり、改善課題と言えます。そのために、毎年5月に開催される釜山国際演劇祭と、釜山国際ダンスフェスティバルは注目に値する文化資源の一つとして考えています。

まず、釜山国際演劇祭は、釜山の春を代表する公演芸術フェスティバルとして、2009年、世界フェスティバル連合協議会を構成し、その規模を拡大しております。

また、釜山国際ダンスフェスティバルは、釜山の代表的な海水浴場である海雲台を背景に砂のフェスティバルと時期を同じくして開催することで、シナジー効果を得ているとの評価を得ています。

この二つのフェスティバルの例からご覧いただきましたとおり、世界フェスティバル連合協議会

を構成して各国との連携を強化する一方で、複数のフェスティバルを組み合わせることで開催することによって、シナジー効果をつくり出してこそ、文化芸術イベントを観光資源として生かすことができるということがわかるかと思えます。

また、伝統芸術の観光資源化に向けて、伝統芸術を釜山を象徴する龍頭山公園に伝統芸能の屋外公演会場を設置して、毎週土曜、日曜日に常時公演を行い、韓国の伝統芸術に触れる機会を提供しています。しかし、これを観光資源として結びつけるためには専用の公演場を確保しなければならず、また、これらの資源のブランド化に向けた努力が優先されなければならないと考えています。

また、同時に、韓国の各自治体のフェスティバルが各地で開催されておりますが、全国の現状を見ますと、1,150 余りのフェスティバルが、主に春、秋に開催されております。その問題点としては、地方自治体間の競争によって、似通った、類似したフェスティバルが開催されています。そして、住民参加型よりは、内容のない、余りおもしろくないフェスティバルが多く開催されています。そして、ノウハウが蓄積されていないというのも問題点として挙げられています。

したがって、選択と集中によって地域フェスティバルをサポートし、専門家たちの参加の幅を広げ、フェスティバルとしてひとり立ちできる力をつけて、これを優れた観光資源に変えていく必要があります。

最後になりますが、釜山は海、川、山が調和した自然環境と港湾物流都市としてのメリット、さらに歴史と伝統を誇る文化遺産に恵まれています。このような資源を観光産業の重要な要素として変えていくためには、世界レベルの文化インフラを拡充するとともに、釜山地域の特化した文化芸術イベントを発掘、育成し、釜山の持つアイデンティティと潜在力をもとに文化産業を発展させていく必要があります。

また、ほかの自治体や国とは差別化した文化イベントと、これに対する広報、マーケティング方を講じる必要があります。さらに、複数のフェスティバルを統廃合し、フェスティバルの効率性と活性化を図る必要があります。すなわち、釜山らしさを世界的に発信することが、釜山の文化観光産業の育成に向けた近道になると考えています。

釜山の代表的観光資源としては、世界最大のデパートで、ギネスブックにも載っている釜山のセンタムシティデパートがあります。また、毎年8月1日に海水浴場をオープンしていますが、そこにつくられるビーチパラソルも世界規模のものとなっています。ギネスブックにも掲載されています。この写真は、2008年8月2日に7,937個のパラソルを開いて撮った写真です。

次に、多大浦音楽噴水です。これも世界最大規模の噴水で、ギネス韓国記録に登載されています。面積2,519平方メートル、円形の直径60メートル、周囲180メートル、最大高さ55メートル、位置は釜山の多大浦海水浴場の近くにあります。

そのほか、国連記念公園があります。世界11カ国の2,300人の兵士がここに葬られています。釜山に位置しております。

ほかに国内の山につくられたお城の跡ですが、韓国釜山地域では最大規模のものがあります。長さ1万8,845メートル、城壁の高さ1.5メートルから3メートルとなっています。釜山金井地区にあります。

次に、広安大橋です。国内唯一の海上、二層でつくられた橋です。長さ7,420メートル、幅18メートルから25メートル。夜のライトアップが大変すばらしい橋です。夏はここで花火大会なども開かれております。もし機会がございましたら、釜山を訪れ、釜山のさまざまな観光地、観光スポットをごらんいただければと思います。

以上をもちまして、私の発表を終えさせていただきたいと思います。

②釜山広域市の発表に対する質問・意見

(i) ウラジオストク市国際関係・観光局 局長 Viacheslav KUSHNAREV

まず初めに、釜山市崔同煥さんの発表に対してお礼申し上げたいと思います。大変すばらしい発表でした。

この発表を聞きまして、釜山市はすべて必要な資源を持ってらっしゃる、文化芸術振興にふさわしい資源を有してらっしゃるという印象を受けました。釜山市への観光客は既に伸びているということで、釜山市のいろいろな取り組みが今後も続けられることを確信しました。

もちろん、非常に重要なことは、観光客を誘致することですが、それについて質問があります。もちろん、このようなプログラムをやっていく、そして観光、文化芸術活動というのはとても重要ですが、広報やプロモーションなくして、いろんな集中活動なくして、何ができるのか。釜山が今やっていることは最小限のことだと思います。釜山市はどのような資源を持ってらっしゃるのでしょうか。観光や芸術文化を振興する上で、どのような資源をお持ちで、どのような広報活動を行ってらっしゃるのでしょうか。これが私の質問です。

崔同煥（釜山市）

釜山市では、文化、観光に対するさまざまな芸術イベントを用意しておりますが、広報、あるいは広報のための各国向けのパンフレットの製作などは、文化、観光のためにマップづくりからインバウンド、アウトバウンド観光会社を通して、各種資料、冊子、広報活動を行っています。時期的には国際映画祭あるいは国際演劇祭、国際ダンスフェスティバルの開催時期に広報ポストを立てたり、ポスターを張ったり、あるいは各国に対して資料を提供することによって、釜山市のさまざまな文化活動を支援や、広報活動をしております。

Viacheslav KUSHNAREV（ウラジオストク市）

もし、よろしければもっと細かくお聞きしたいです。例えば具体的な数字、どのような予算が広報活動にあるのか、あるいは観光客の数など。釜山市を訪れている観光客の数など具体的な数字を挙げていただけますでしょうか。

崔同煥（釜山市）

観光客の数は、発表資料をご覧くださいますと、お配りした資料の6ページになります。2006年から2008年までの現状になっております。外国人観光客の数は、統計上の調査によってほぼ正確な数字だと思いますが、この数字を参照してください。2008年は、186万7,000人が訪れております。韓国を訪れた観光客の数は、この数字はあくまで釜山市を訪問した外国人訪問客の数字で、韓国全体の数字はまだ今のところわかりません。

それから、広報の予算ですけれども、私は文化芸術部門を担当しておりますので、文化観光として予算をどれだけ編成しているのか、実績はどの程度であるのかなど詳細な数字につきましては若干不十分ですが、その点御了承いただきたいと思います。

(ii) 鹿児島市文化課 主幹 児玉哲郎

釜山市さんの文化観光都市としての先進的な事例、興味深く聞かさせていただきました。鹿児島市においても、観光ということで、世界有数の火山である桜島、それから明治維新に向けた近代国家へ変貌された変革があったわけですが、そういった時期の文化財、これにつきましては、現在、九州・山口の近代化産業遺産群ということで、世界遺産登録に向けた取り組みをしているわけですが、そういったハード面のものの活用をこれまで注視してきているわけですが、本日、その文化振興の部分を観光の方と結びつけて誘致する先進的な事例ということで非常に興味深く聞かせていただきました。

鹿児島市においても、先ほど福岡市さんの事例がありましたが、文化芸術団体を学校に派遣し、芸術鑑賞授業を行っております。それから郷土芸能保護事業ということで、先ほど釜山市の例でもありましたが、そういった団体に対する支援もやっています。そこで、文化振興については、なかなか現在観光と結びつけていないということで、非常に参考にさせていただきました。

そこでもし、具体的な方策等があれば教えていただきたいのですが、そういった観光面の郷土芸能を発表する場合に、一定の完成度が求められるかと思うのですが、そういった人材の育成のサポート、その辺について具体的なもし方策がおありであれば、お聞かせいただきたいと思います。

崔同煥（釜山市）

文化芸術については、先ほど紺屋 2023 プロジェクトなどのように、釜山市では若い芸術家たちを育成するために、創作村を造成しています。2009 年度に若い芸術家を育成するために予算を重点的に投入しています。広安里という場所に創作村を造成しています。湾の新エリアなどに新しい、使わないアパートなどを探してこれを造成していく計画です。

釜山芸術祭を通して若い芸術家を、音楽祭を通して若い音楽家を育てるプログラムなどを進めております。まだまだ十分ではありませんが、釜山市としても文化芸術に対する予算投入を、市長初め政策ブレーンではもう少し強化していかなければならないと思っております。釜山市としては、若い芸術家を育てる意味ではまだ十分ではないと思うところです。

吉本座長

午前の部終わるに際して、実は私も釜山市に今年の2月にお邪魔して、崔さんの前任者の方をはじめ、釜山市の方にいろいろお話を伺いました。大変印象に残ったことがあるのでちょっと最後に御紹介したいと思います。

いろんなセクションの方にお話を伺って、たしか釜山市の政策の全体の企画を担当されている方にお目にかかったときに、横浜市の創造都市政策の調査で来ましたと言ったところ、今頃創造都市というのを政策目標に掲げていたのではもうだめではないかという御指摘を釜山市からいただきました。

それは大変印象に残っています。同時に、崔さんは文化芸術振興の御担当ですが、例えば映像文化の振興のセクション、産業誘致のセクション、さまざまなセクションの方に話を伺ったのですが、それぞれのセクションが、今日、崔さんが冒頭でお話しされました、文化というのが新しい価値を生み出すという考え方を、釜山市全体が共有して、それぞれの分野の政策に取り組んでいるということ、大変印象深く覚えております。

それともう一つ、今日は詳しい御説明がなかったのですが、皆さん御存じのように、釜山市の国

際映画祭というのは大変成功しています。東京の国際映画祭よりも随分と国際的に注目も高いと伺っています。その映画祭は、ディレクターがパクさんという方だったのですが、もともと映画の評論家をされていた個人の方で、その方を中心に民間から、全く個人の発意と熱意で立ち上がって今の大成功を導いていると聞きました。それに対し、釜山市さんは財政的な全面的なバックアップをされている。しかも、事業の内容については、市は一切口を出さないということをおっしゃっていきまして、民間主導を、まさしく先ほどの紺屋の野田さんの話にありましたが、民が公共をつくっていく、民が映画祭を立ち上げて、釜山市の公共的な財産になる映画祭というものを、行政は多大な支援をしているという、ある種の理想的な文化催事だったと思います。

なおかつ釜山市は、それを文化催事だけではなく、そこに映像産業を集積しようということで、文化から始まったものが産業や経済への広がりを持った政策を展開されているということで、大変勉強になりました。

最後にちょっと発言させていただいたのですが、崔さん、その辺のことについて何か追加で御発言があれば、最後に一言お願いしたいのですが、いかがでしょうか。

崔同煥（釜山市）

ご興味をいただきまして、まことにありがとうございます。私どもはこの文化芸術のサポートについては、先ほど申し上げたとおり、予算は出しますが口は出さないという大前提のもとに支援を行っております。既にアーティストの方たち、日本の場合と、釜山、韓国の場合のアーティストの方たち、特段違うとは思えません。アーティストの方たちは、公に対して予算の支援をしてもらいたいと常に言っております。しかしながら、私どもが常にこの予算に関しては十分ではありませんが、最善の努力を尽くしています。また、予算は出しますが、それ以降、法律的に何ら問題がなければ、そのプログラムや、ソフトウェアについて一切私どもは干渉いたしません。そのような形でサポートしているということを最後に申し上げます。ありがとうございました。

(5) シンガポール発表

①シンガポールにおける文化の推進と開発

シンガポール情報通信芸術省 副部長（芸術部）TING Wei Jin Kennie

シンガポールにおける芸術文化推進について話します。発表は二つの部分に分かれています。

最初の部分では、シンガポールにおける文化芸術の発展と、特に文化の推進について、2番目の部分では、シンガポールにおける文化地区の運営について話します。これは具体的には、シンガポール公共地区（Civic District）についてです。

最初に、シンガポールにおける芸術文化の推進について、その枠組みを話します。私どもの公共政策はルネッサンスプランと言います。これは2000年に発表されたもので、2008年から2015年までをカバーし、特徴あるグローバルシティとしてのシンガポールを目指すビジョンです。このスライドにあるように、文化と芸術が、学習と創造性にインスピレーションを与え、働き生活し遊ぶ都市としてのシンガポールの魅力を高め、国家建設のための文化的安定をもたらすという目的です。既に計画は第3段階に入っており、三つのターゲットがあります。

一つは特徴あるコンテンツを発展させること、アジアの文化芸術の豊かな融合としてのシンガポール芸術文化を発展させることです。2番目はダイナミックなエコシステムを発展させるということです。つまり国際的な芸術関連ビジネスや施設を開発し、アジアの芸術好きの来訪者の目的地としてのシンガポールをつくり出すということです。3番目は市民参加です。つまり市民にどんどん参加を促し、そして文化的な啓発をするということが目的になっています。

それから特徴あるコンテンツを育てるということを大事にしています。それは、シンガポールと特にアジア、特に東南アジアの文化に根差したオリジナルなコンテンツを推進しています、そして、私たちは特に芸術祭をやっており、これは革新的な作品を生み出しています。例えば毎年シンガポール芸術祭というのがあり、ここには才能が結集し、東洋と西洋の一番すばらしい部分を融合させるという目的でやっています。それから、これに対しては補助金も出していますし、アーティストレジデンスや、創作活動について、それからシンガポール人とシンガポールのアジア人アーティストとのコラボレーションについても補助金を出してサポートしています。

それから、そのためには、世界一流の文化施設があります。これはさまざまな文化交流のために利用する、文化交流センターになっています。もう既に国立の劇場というのがありますが、ここでは定期的にさまざまな展示会が行われています。昨年だけでも現代美術、近代美術、地域としては、中国、インド、マレーシア、ベトナム、韓国、その他をカバーしたエキシビションが行われています。これによって幅の広いコンテクストをみんなが理解するというのを私たちは目指しています。これは中国人とマレーシア人のアーティストがどのような活動をしているかということを紹介するものです。それから、エスプラナード劇場というのがあり、これが中心的な文化施設になっています。世界じゅうから、そしてアジアからパフォーミングアート、公演芸術を呼んで開催しており、また同時に伝統的な芸術文化、そして現代的な芸術文化を推進していますが、この際にはコンテンツとともに、知的所有権の保護も推進しています。

2番目ですが、ダイナミックなアートエコシステムを非常に重要と考えています。情報通信芸術

省は、パートナーのシンガポール経済発展局と共に、プロデューサー、ギャラリー、興行主、オークションハウス、アート作品の収集家、民間のミュージアム、あるいは文化財保護局など、多様な人材に呼びかけて協力を仰いでいます。シンガポール経済開発局の国際事務所を通じて、国際的で主要なギャラリーや興行主等、がアジアのヘッドクォーターを設置することを動機付けしています。目的としては、アジアの現代美術のマーケット、市場を育てるということですし、また非常に富を蓄積した個人や収集家に対して、その恩恵を社会に返すように、高い付加価値をつけた仕事を専門職として育てるよという点に集中しています。それから、我々の非常に大きな仕事として、文化的な公共地区を開発しています。我々は、国内から、そして海外からも人を集客したいと思っており、これについてはまた後半で話します。

非常に生き生きとした文化芸術というのは、やはりそれを楽しむ観客が必要です。特に我々はコミュニティレベルで、地域レベルでシンガポール人にターゲットを当てた活動をしています。我々の戦略は、非常に広範にわたっており、まず例えば助成金等の形で、その活動を根づかせる。文化機関でいろいろなイベントもやります。また、芸術祭でも、特定の民族集団を対象にします。例えばマレー人、あるいはインド系の住民、あるいは高齢者対象、あるいは青年のためのフェスティバルなどをやります。それによってだんだん文化芸術を根づかせていますが、最近ではインターネットも活用しています。特にシンガポールでは若い人たちがインターネットをよく使っていますので、そういった面での努力もしています。

最終的にはコミュニティにおいて、我々はもっともっとパートナーや、パトロンや、あるいは寄附をする方たちを募っています。インセンティブ、優遇策としましては税金の免除、あるいはさまざまなパトロンとしての賞を授けるということを毎年やっています。つまり、芸術のパトロン賞や、芸術遺産のパトロン賞というものがあります。非常に幅広い活動をやっているわけです。

今現在開発推進中のシンガポール公共地区の開発プロジェクトについて話します。シンガポール公共地区というのは、シンガポールの歴史的な中心地にあります。これは、スタンフォード・ラップル卿と言う、シンガポールの創立者にあたる方が、初めてシンガポールの土地に一步を踏み入れた地区です。ここは港のそばですが、18世紀から20世紀にかけてアジア各地からたくさんの人たちがチャンスを求めてやってきて上陸した都市です。最終的にその人たちは現代のシンガポール国民になったわけです。今現在もこのシンガポール公共地区というのはシンガポールの中心地に立地しています。ですから、公共的にも文化的にも、そして経済的にもさまざまな重要な機関、施設がここに集中しています。例えば、財政関係、金融関係の施設もここに集まっていますし、私の省もここに立地しています。

そして、この地区ですが、大体1980年までは公共機関だけが使っていた場所です。それを我々は文化地区としてさらに再建しようとしているわけです。つまり、劇場や、美術館や、歴史的な場所や、そういうものが集まっている場所ですので、それを意図的に昔は教育機関や、お役所の建物であったものを変えようとしているわけです。植民地時代には、そんなお役所の建物であったものを今現在文化施設に建てかえています。例えば、元植民地のビルだったものに、今の国立美術館などが全部入っています。例えば昔の最高裁判所の建物や、昔の市役所の建物、それが今国立美術館になっているわけです。90年代の初期には、国立パフォーミングアートセンターが開発されました。これは意図的に湾のそばにつくられたわけです。この地図で言うところちょうど下の方につくられています。それからエスプラナードシアターが、2002年に開設されました。これができたおかげでこの地区は本当に文化地区として生まれ変わったわけです。

それからもう一つの地区があります。パダンといいます。これはマレー語の言葉ですが、植民地時代にはこれは民間も、官民両方の人たちがつかう地区でした。しかし、植民地時代にはいわば上流階級、支配階級の人たちが集まっていたわけです。しかしながら今は、大きなイベントで使われています。例えばF1グランプリ、独立記念日のパレード、シンガポール芸術祭のオープニングなどに使われています。パダンに立ちますと、ありとあらゆるところでいろいろな景色が見られます。例えばシンガポールの金融地区というのがありますし、別な方向を見ますとエスプラナードビルが見えます。それから、元最高裁判所の建物、市役所の建物、反対側にはラッフルズシティ、あるいはサンテクコンベンションセンターという大きな会議場があります。

そして、エスプラナード劇場は、シンガポール、あるいはアジアのコンテンポラリーアート、現代芸術のセンターとして、また伝統芸術のセンター・劇場としての役割を果たしています。ですから、今は皆に知られていますが、シンガポールの人たちはこの建物をドリアンと呼んでいます。屋根がとげとげしたデザインになっているからです。場所は、マリナベイという湾岸に立地しています。ウォーターフロントです。そして例えば非常に静かな公園というのがあったわけですが、2002年以來4,500万人の人がここを訪れています。昨年だけでも800万人以上が来訪し、公演回数は2,500回以上に上っています。そしてエンプレス・プレイスという場所がありますが、これはエスプラナード劇場のちょうど隣にあります。これはこの地図でちょっと、さっきの写真で下の方のものですが、これは植民地時代につくられた建物で今はシンガポール交響楽団の本拠地です。そして非常に大きなシンガポールの芸術団体が活動の本拠地としてきたわけです。その近くにあるのがアジア文明美術館であり、これは東南アジア、中国、インド、中東などの作品、あるいは文物をギャラリーの中に展示しています。規模から言うと、例えば中国の故宫博物院や、イスタンブールのトプカプ宮殿の美術館や、バチカン美術館に匹敵するほどの規模になっています。もう一つ、アジアの現代美術、視覚芸術、公演芸術などの展示場となっているアートハウスがあります。

さらに2014年に完成予定の別の美術館がありますが、これは国立美術館です。特に東南アジアの美術に対して収集、保存、調査、研究を行うことになっています。また、パダンにも非常にすばらしいさまざまな地区がありますが、一つがフォート・カニングヒルというところです。これは市内中心部のレクリエーション地域です。そして、フォート・カニングというのは、市内の中の最大の公園地区であり、シンガポール人にも観光客にも非常に好まれる場所です。歴史的には、14世紀にたくさんの方が居住しており、実はその当時のマラッカのスルタン、イस्कンダールシャーという方ですが、その方が最終的に住み、その墓もあるといった説もあります。しかし、実際に植民地時代には総督府の植民地政府、総督府の邸宅でもあり、第2次世界大戦中の英軍司令部としても使われた場所です。そこが今では、国際的な戶外コンサートも行われる場所となったわけです。ダイアナ・クラールや、ユッサー・ンドゥールといった方たちが演奏しています。

ほかにも、中国人はこういうところに来て、マレーシアとインドネシアからも来ていますので、何世紀にもわたって地元のマレー文化というのを取り入れてきたわけです。ですから、中国系とはいいながら、特定のマレー半島独特の文化がシンガポールに育っているわけです。そこでそれを展示するような美術館が幾つかできています。非常に若い人たちを引きつけるための美術館ですが、ここではコンサートも行われていますし、いろいろなプログラムが行われています。特に新しいものと古いもの、東洋と西洋の融合ということがこの特徴になっています。

そしてこの東洋と西洋の融合というのが、まさにシンガポール文化の本質です。この特徴を顕著にあらわした地区がこのエリアです。非常に壮麗で歴史的で象徴的です。ですから非常に伝統的など

ころにいきなり現代美術や、洗練されたものがあると、それを見て好きになったり嫌いになったりというのは、人それぞれですが、いろいろなレベルで、歴史的、重層的な表現が行われているわけです。ですから、我々はこの地区をアジアの中でも絶対みんなが行かないといけないと思うような文化芸術地区として育てようとしています。

ですから、アジアのアート、アジアの中のアートというものをここに展示するということが考えられています。先ほど言いました国立芸術劇場、美術館もこういったところに作られる予定になっています。それから、歩行者の回遊性を強化することによって、コンサートホールも再開発し、そして、最新の機器を備えたすばらしい劇場環境をつくらうとしています。

歩行者の回遊性を強化するという事は、歩きやすくするという事ですが、フォート・カニングや、パダンや、こういうところをつないで、だれもが簡単に一つの場所から別の場所に行けるように設計をしています。そしてこういった文化施設やそこで実施するプログラムを建物の中からもっと外へ、外へ、公共の空間へ出そうという努力をしています。特にパダンなどの地区ですが、我々はパダンそのものとフォート・カニングを活用しようとしているわけです。これらの開発は、2015年に完成予定です。シンガポールに来たことがない方はぜひ来てほしいと思います。

また、来たことがある人はまた戻ってきてほしいと思います。それまでには、昔のシンガポール、皆さんが覚えているシンガポールは、きっと大きく姿を変えているだろうからです。ぜひ、シンガポールにおいでください。

②シンガポールの発表に対する質問・意見

(i) 光陽市港湾通商課国際協力 TEAM 長 宋 路鍾

私どもの市は、去年の11月にアジア太平洋都市サミットに加入申請し、今回初めての参加となります。

シンガポールは文化芸術観光などインフラが大変豊かな美しい国です。今日の発表で特徴のあるさまざまなコンテンツと各種に施設について、大変印象深く拝聴しました。午前中の都市の発表、またシンガポールのお話を伺って、私どものまちづくりに大変参考になります。

光陽は、国際コンテナ港を中心とした物流産業と、ポスコといった巨大企業を中心とした鉄鋼事業を中心とするまちです。こういった産業都市を補完するために文化芸術とレジャー産業を育成したいと思い、これまで取り組んで来ました。文化村、テーマ村、戸外の劇場など市民の参画のもと、さまざまな文化芸術空間に支援をしています。今回の会議を通じ、いろいろ学んでいきたいと思っています。

シンガポールの方にお聞きします。芸術のエコシステムの導入をされたとのことですが、その事例について具体的にもう少し教えてください。

TING Wei Jin Kennie (シンガポール)

エコシステムの、どういう部分に具体的に興味を持っていらっしゃるのでしょうか。つまりコンテンツクリエイター、またいわゆる消費者、文化の消費者ということだけではなく、いわゆる健全な社会がなければいけないということで、そういう意味で私どもは支援をしているわけです。つまりパッケージ化をして、コンテンツをオーディエンスに提供するという事、特徴的な専門職といえますと、例えばビジュアルアート系、それから例えば資金をサポートするという事、それ以外にもい

いわゆるキュレーターのサポート、あるいは保存の活動の専門家をサポートとして送ったり、またパフォーマンスアートについても専門家を送ります。アートだけを支援するというのではなくて、いわゆるそういった周辺の人材的な支援、例えば照明の専門家を支援するなど、管理面でのサポート、それからアートのマーケティングについての支援、このようにあらゆる側面で支援を行います。資金提供もそうですし、補助金を出すということもそうですが、それだけではなくて、いわゆる人材的な支援であったり、ビジネス界の人たちも取り込んで、いわゆる技術的なサポートをするということをやっています。つまり持続可能で循環する様な文化芸術業界の枠組みをつくり上げて、そして消費者に対して、あるいはオーディエンスに対して提供できるようにするということがエコシステムの内容になります。

吉本座長

エコシステムという言葉について、ちょっと私の方から補足したいと思います、今日配付されている日本語訳の資料だけでは、このエコシステムというのが十分うまく伝わりにくいかもしれません。

これは私なりの理解ですが、もしそれが違っていけばもう一度ティングさんに補足いただきたいと思います。エコシステムというと何か環境的なイメージがあるので、環境と文化の関係というふうにとらえられているかもしれませんが、今ティングさんからお話があったように、アーティストや、それからビジネスセクターや、行政や、いろんな関係者がある種生態的に連鎖しながら、全体としてダイナミックな動きを生み出すという意味合いで、エコという言葉がここでは使われているはずだと思います。私はそういうふうに理解していますが、よろしいでしょうか。

TING Wei Jin Kennie (シンガポール)

全くそのとおりです。エコシステムというのは包括的な文化を捉えた観点ということ、つまり、そのコンテンツそのものだけではなくて、その前にある環境、例えば教育や、それから枠組みや、また、アウトリーチということも意味しています。

(ii) 北九州市芸術文化振興財団北九州芸術支配人 愛甲政志

北九州市は福岡市の隣にある 100 万都市です。かつては日本の四大工業地帯の一つに数えられて、本当に産業都市でした。ところがその産業構造が変換し、都市がだんだん衰退しており、文化芸術を通して都市を再生させようとして取り組んでいます。シンガポールの話を聞く中で本当に古いものを大切にし、新しい息を吹き込み、そしてシンガポールを世界の文化の中心都市にしようという意気込みが、今の発表で十分に伝わって来ました。

北九州市もシンガポールが掲げておられるように、少し前までルネッサンス構想というものを定めまして、都市を再生していこうという計画を進めて来ました。お互いに何かこういうふうな意味では共通点があるということを感じています。

それから、大きな目標としてここに上げてありますけども、国家建設のための文化的安定をもたらすという、何か大きな目標といいますか、そういうふうなものがあるって、本当に目指す方向性が素晴らしいという感想を持ちました。

吉本座長

ありがとうございました。北九州市さんもルネッサンスという目標を掲げているということだし

た。

次に移る前に、ちょっとだけ私の方からシンガポールのプレゼンテーションの補足をさせてもらいたいと思います。

冒頭、ティンクさん紹介されましたが、ルネッサンスシティ3というプランが、こういう3冊の冊子にまとまっています。私もケニーさんにお話を伺ったことがありますけども、ルネッサンスシティの1が、たしか2000年、その次の2が2005年、それでこれが昨年できたというふうに伺っています。その話を伺ったときに、私が大変印象に残っているのは、ルネッサンスプランの1がどのように達成されて、何か達成されなかったかというしっかりとした評価を行った上で次のプラン2が出され、さらにそのプラン2の計画期間が終わったときに、その評価が同じように行われ、その上でそのプラン3ができていくという、非常に継続的かつ戦略的な文化政策、そこには当然都市の活性化の視点というのが盛り込まれているのですが、それがすごく描かれており、ある種の理想的な行政のプランになっていると思いました。ですので、ケニーさんに会ったときは横浜市の調査で行ったのですが、横浜市にもこれを持ち帰り、あなた方はこれをつくるべきですと、私は提案をしました。日本の都市の行政のプランにおいても、そういうプランを立ててどこまでいったか評価をし、それに基づいて次のプランを立てていくというのが、これから最も取り組むべき、日本がシンガポールから学ばなければいけないことだと思い、最後に御紹介させていただきました。

もう一つ、この書類というか冊子は、非常に美しいです。中が非常にクリエイティブにデザインされています。日本の役所がつくる文書と全く違います。それもぜひ日本の皆さんにも学んでほしいと思いました。

ティンクさん、何かこれに補足することありますか。

TING Wei Jin Kennie (シンガポール)

シンガポールの文化というのは、恐らく、とてもロジックに富んでおり、理論的であるということです。シンガポール人も同様です。例えば、弁護士、そしてエンジニアが代表的だと言われてます。ですからそういう意味ではできる限り我々の文化をうまくあらわそうとしていますし、それからまた、きっちりとKPIに合わせ、それから予算もきっちり合わせるようにしようという姿勢があると思います。それにより、非常に目に見えた結果が出せるように、そして経済効果をもたらせるようにということを目指しているわけです。

ですから、芸術組織であっても、そういったことを目標とするわけです。また、行政にかかわる者としても、例えば予算をしっかり通し、守ることや、あるいは計画、例えば文化の開発においても、やはり究極的には予算に、また経済的効果というものを念頭に置いた上で実施するわけであり、そして、市民がしっかりと目に見えた結果が出てくるように、そういったことを目指してやっています。

(6) バンコク都発表

①文化芸術活動によるバンコクの魅力づくりについて

バンコク都文化・スポーツ・ツーリズム局 政策・企画部長

Sukritta SUECHAROEN

バンコクの、文化芸術活動による魅力づくりについて発表したいと思います。

バンコクはタイの首都です。皆さんも御存じのことと思いますが、バンコクはアジアにおいて最もダイナミックでかつカラフルな都市の一つとして、広く認知されています。バンコクはまた、天使の都、宝石のような偉大な都と呼ばれています。まず、バンコク都について御説明します。これは地方自治体で、いろいろな責務がありますが、バンコクの市民の生活の向上をするということが究極の目的です。バンコクの文化政策についてお話ししたいと思います。

まず、地域の伝統文化を振興するという事です。バンコクは文化的に多様で、いろいろな文化がバンコクに存在しています。そして、観光促進に向けての文化の学習を推進し、タイの芸術と伝統を保全しています。市役所ではいろいろな文化、地域の知恵を紹介しています。

バンコクは文化的多様性を持つ都市で、文化的メガシティにおいて良好な生活を提供するという事を目的としています。

次は、芸術文化に対する主要なコンセプトですが、郷土愛の啓蒙活動、タイのアイデンティティとして、シンボルの価値を周知する。そういった活動を家庭で始める。家庭こそが家族と社会を結びつけるルーツだからです。それから芸術と文化というのは生活の一部です。だれもが日常の中でつい触れ、そして使っていくものが芸術文化であると考えています。

芸術文化もいろいろありますけども、非営利で教育的な性格がその中心にあると考えています。

芸術と文化というのは多用途の複合施設の中に置くべきだと考えています。また、芸術と文化は、多くの点で都市にとって利益をもたらすものと考えています。それから、芸術文化のアトラクションは、楽しく、価値があるものであり、観光振興の一部として位置づけられるべきだと考えています。

バンコクは文化の認知度を高めていきたいと考えています。そのために、芸術と文化のアトラクション、魅力を促進していきたい、バンコクの文化というものの意識を高めていきたいと考えています。

文化スポーツ観光局は、バンコク都の一つの局で芸術文化の魅力づくりを直接管轄しています。主な目的は、まずタイの文化芸術を世代から世代にわたって守っていき、促進し、そして維持をしていくこと。タイの文化的な価値やアイデンティティをバンコクの市民に気づいてもらう、より知ってもらうということです。

具体例として、バンコクの魅力芸術文化を通じて保全し、振興していくというプログラムの実例を紹介します。

まず、文化交流です。これは地域レベルで、あるいはほかの都市と国際的なレベルで交流を行っています。例えば姉妹都市との文化交流がその例です。

この写真は地域との文化交流ですが、タイの北部との文化交流のプログラムです。次が中央部との文化交流。タイのいろいろな地域におけるいろいろな文化伝統を、バンコクの文化伝統と交流させ

るというプログラムを行っています。この写真もその例です。これは南部地域での文化交流プログラムです。

それから、国際的な文化交流プログラムもあり、これはソウルで行ったものです。ベトナム、ラオス、等ほかの都市でも行っています。これはごく一例です。

次の活動は、タイの伝統的なお祭りです。たくさんこうした伝統的な祭りがあります。幾つか重要な例を御紹介します。

まずはミュージカル、古典舞踊です。指導者に敬意を払う式典です。これは音楽の神、そしてタイの古典舞踊です。伝統的な式典です。クル、タイの指導者という意味ですが、これは毎年行われる指導者のための式典です。この式典によって音楽関係者あるいは教師、指導者がよりよい生活が送れ、よりよい職につけるようにということも目的の一部となっています。これが音楽の神です。タイの神に関する写真で、これもいろいろな活動の一部です。学生が参加をしており、その音楽や芸術の教師に対して敬意を払っているところです。

ほかにもいろいろな活動があります。タイは仏教の国ですので、たくさんの宗教的な活動が行われています。その中でも重要なものを御紹介したいと思います。マカブチャという式典が2月、それからアサハブチャ、これが7月、それから5月にはヴィサカブチャというものが行われます。これは人々が善行を行い、それから、法話に耳を傾け、鳥や魚を自由にさせるといった活動が朝に、そして夜には、ろうそくを手にして寺院の周囲を人々が歩きます。これは朝の写真で、これは夜の写真です。これは仏教の祭典です。

このように人々が善行を行うようなそういった日を祭典の間に行うわけですが、そして、目的は家族が宗教活動に参加できるようにすること、ということで日曜日に行われています。そして場所は公園などを使っています。善行、神の声を聞く、法話を聞く、瞑想をする、心の平和を得るといった活動が行われています。これは瞑想のシーンです。これはバンコクの知事が僧に喜捨をしているところです。法話です。これは学生による瞑想で、公園で行われています。

それから、ソンクランですが、これはウオーターフェスティバル、水の祭典です。ソンクランというのは、タイ語で水を意味します。水が不幸を洗い流すという信念のお祭ですが、新年の伝統行事として4月13日から3日間行われます。このフェスティバルですが、BMAはタイの政府観光局と協力をして、このお祭を毎年4月12日から15日間開催をしています。目的はタイの伝統の保全、それから観光振興となっています。

この写真ですが、バンコクの知事、事務次官がこの仏像にお水をかけているところです。ウオーターフェスティバル、ソンクランの午前中の模様です。花のパレードもあります。砂を使った芸術作品。そしてこの写真は、僧にお水をかけています。これは祝福を求めているところです。それからこれはおもしろがって水をかけ合っているシーンです。

この写真はロイクラトン祭の写真です。このお祭は、陰暦の12月の満月の夜に行われます。ロイはフロート、つまり台車で、クラトンは丸い山車に載せるもので、バナナの葉や、花や、ろうそくが1本、お香などで飾られています。これは水に対する敬意をあらわす、与えてくれる豊かさに対して敬意を払う、その水を汚したことに対しての許しを請うということが目的です。そして不運や悪運を取り除いて将来の幸運を祈るといったことが目的です。バンコクの夜に、特に人気のある場所で行われておりまして、特にチャオプラヤ川沿い、あるいは公園などでいろいろなお祭の活動が行われています。

これはその一例です。これは夜のシーンですが、お祭にみんなが出かけています。バンコクには

下記のような文化研修センターが建設されています。地域文化博物館、それから子供発見博物館などです。それからバンコク文化研修センターです。

まず地域文化博物館ですが、これは人々の協力参加型で、地域レベルでさらに多くの芸術文化学術情報を創出するところです。

これはコミュニティーに維持されてきた地元の人々の地域文化伝統の基本的な仕組みづくりを促進する、これはバンコクの中のいろいろなコミュニティーにこの地域文化博物館をつくっていくというプロジェクトで、そうすることによって、多くの文化に対して注意を払い、維持していく啓蒙活動の一環となっています。前のバンコク知事は、バンコクの 50 の地区にこの地域博物館を建設するという政策を策定し、現在 27 ができています。それぞれの地域博物館が、それぞれの地域の文化伝統、そして生活の様式、そういったものを紹介しています。そのコミュニティーの、地域の委員会が運営をして、予算はBMAの方が支援をしています。

これは地域博物館の一つです。二つのディストリクトがここに出っていますが、左がクロンクサンで、右側がソンプリ地区です。そうした地区にこの地域博物館ができています。

そしてこれが新しいもので、バンコク芸術文化センターBACCですが、これは中心街にある現代美術・芸術のための施設です。芸術、音楽、劇、映画、デザイン、文化、教育イベントのプログラムがここで行われています。非常にフレンドリーで気さくな雰囲気です。レストラン、書店、図書館が併設されています。

これがそのBACCの建物です。パトゥンワン地区です。近くには大きな百貨店もある中心街に位置しています。このBACCは、目的があり、まず芸術家たちの交流の拠点をつくるということ、それから、過去から現代までの文化的な継承性、これを重視しています。そして、文化の対話、ネットワーキングの新しい境地を開くこと、そして官民のパートナーシップも促進するということです。そして、コンテンツや学芸分野、文化的な運営に関する文化交流の拠点をつくらうということも目的です。そうすることによって国際的な活動拠点となることを目指しています。

これもBACCで、11階建てです。そしてここではバンコク芸術文化研修センターという財団をつくり、ここは民間がコミュニティープログラムとして地域のプログラムを推進しながら、いろいろな活動に従事しています。施設としては11階建てで2万5,000平方メートルあります。中にはまずギャラリーがあり、マルチメディアの展示場、写真展示室、それからレストランやショップ、図書館、ホールなどがあります。この写真はBACCのいろいろな施設です。会議室などもあります。

このBACCの開館式典が行われたのが2009年8月19日、グランドオープニングですが、これを主催したのは王妃陛下でした。この公式の開館式典が先月行われましたが、そのときに王妃が臨席をされました。首相、事務次官、バンコク都知事が写っています。そして、こちらが財団の理事です。このグランドオープニングでは、王妃のご臨席のもと、いろいろな活動を行いました。

他にも様々な活動をこのBACCで行っています。例えば、写真展があります。これはシンドン王女主催の写真展です。これは王女が撮影された写真を展示したものです。サイアムスマイルシティ展示会という事業も行いました。これも展示会です。アートキャンププログラムもこの研修センターで行っています。

アーティストマーケット、映画の撮影会なども行っています。今現在は国王に関する展示会を行っています。そして王妃に関する展示会を行っています。プミポン国王の肖像画に関する展示会で、これを見ることによって、タイの社会、そして芸術の中でどのように芸術作品が考えられてきたかということを見る絶好の機会となっています。他にもいろいろな写真をセンターで展示をしています。

国王あるいは王妃の肖像画や写真などが展示されています。

この写真ですが、タイの王室と他国との友好関係を象徴している写真です。1960年代、国王それからシリキット王妃が友好関係を積み重ねてこられてきています。これは随分古い写真です。

それから文化協力のネットワークについて御紹介します。このBMA文化カOUNシルというのがあります。それから、地域レベルでネットワークをつくっています。それから、財団、NGO、芸術家の協会、学校、地域社会、そしてBMAの文化カOUNシル、こういったいろいろな団体の間でネットワークをつくっています。

バンコクは多様な種類の近代化が行われている拠点です。同時にバンコク、タイはユニークで文化的な象徴を維持しているところでもあります。ほかではなかなか見られないようなものがあります。例えば、文化的なアトラクションとしては、マナー、しぐさがあります。両手を胸のところに合わせて、少し頭を下げて敬意を払うという、しぐさがあります。これはバンコクあるいはタイだけしかないようなもので、ほかの国ではなかなか見られないしぐさです。これこそタイの人々のおもてなしの心や友好をあらわしています。そしてほほ笑みです。ですから訪れる人が非常に温かい、幸せな気持ちになることができます。このような文化的な魅力というのは、何の投資も必要としません、タイの人々はこうしたしぐさや習慣を家族から、社会から、学校から自然と吸収をしていたわけです。そして、それがタイの文化のシンボル、そしてアイデンティティとなっているわけです。

バンコク知事のもとで、バンコクをほほ笑みの都市にしようという政策を進めています。バンコクスマイルという事業です。このバンコクスマイルという事業は非常に重点的に実践されています。ロゴもつくっています。いろんなところでこのバンコクスマイルというロゴを見かけることができます。人々を幸せに、そして楽しくさせるということで、例えば夜の観光、ショッピング、タイの文化フェスティバル、河川、食事、こういったものを御用意しています。そうしたものを通じてタイの文化的な魅力を高めていきたいと考えています。

②バンコク都の発表に対する質問・意見

(i) 国際連合人間居住計画（ハビタット）福岡本部 人間居住専門官 Lowie ROSALES

バンコクの発表に大変感銘を受けました。バンコクは本当にアジアの創造都市の例を示していると思います。このような例はほかの地域には見られない面があると思います。非常に特徴のある独特の文化がバンコクにはあります。そして、何年にもわたってこれを維持してきたわけです。地元の伝統文化と近代文化、近代的な面を融合してきました。私たちの国連ハビタットでもどのようにしたらそれができるかということを研究し、例を示しています。バンコク、タイの人々は非常に深く過去の歴史に根差した生活をしています。しかしまた、未来を見つめてもいるわけです。常に未来のチャンスを求めています。ですから、どのようなことが意義ある行動としてできるのか、例えばその地域だけのためだけでなく、世界のためにその意義ある行動ができるかを考えています。

それから、バンコクの市民のアイデンティティは個人の生活や、地域にとっても根差していると思います。お互いを助け合い、支え合う文化がとても旺盛です。それから、官僚も、行政も民間も、非常に一致団結していると思います。その団結力がユニークであるわけです。ですからお互いのグループの間に不和がない、争いがないというのは、これも一つ創造都市の特徴であると思います。

それから、先ほどの発表にはありませんが、バンコクというのは実は非常に柔軟な都市です。1997年の通貨危機のときもそうでした。そして、バンコクというのはいつでも、何か危機があつて

も非常に安定的なポジションに戻る。決してずっと同じままということではなくて、非常に柔軟に揺れ動くのですが、例えば経済も変動しますが、何らかの団結力が社会の中にある、そのために安定を取り戻すわけです。それはその安定力が文化の中に、伝統の中に根差しているからだと思います。すべてが一体となって前に動いているというのがすばらしいと思います。ある意味では、その地元の方々の働きによってみんなが恩恵をこうむるというやり方です。また、同時に、例えば都市が抱えている問題に対する調整をどうするかということもあると思います。例えば、中流国といえますか、その中間所得層がいるにしてもやはり経済格差が広がっているわけです。ですからそういう面でも芸術文化を使ってそういう経済格差を埋めるというような努力をしているかどうかを考えるべきだと思います。つまり、いろいろな近代の発展があったとしても、すべての人が恩恵をこうむることができるのか、そういうことを考えるべき時期にきていると思います。

(ii) イポー市 TPO 担当員 Jamunarani NADARAJAH

私は非常に貴重な情報をいただきました。この会議に参加したのは初めてですが、すばらしい機会だと思います。確かに芸術文化がいかにその都市の観光を推進するということができるかというのを知るのには驚きでしたし、現代でもそれが言えると思うわけです。

バンコクがいかにその独特の文化を推進してきたかということを目の当たりにしまして、これは本当に誇りに思えることだと思います。

それから、文化に関しても、我々の地域には、いろいろなおいしい食べ物があり有名です。イポーではそういう地元の食べ物があります。首都、クアラルンプールは、スポーツや施設の中心となっています。イポーでは、7月の第1週に国際マラソンが行われ、また、いわゆる室内ホッケーのようなフィールドホッケーといったスポーツイベント、これはスルタン・アズラン・シャーという王族の方が非常に興味を持たれているものですが、そのイベントをやっています。私はこの会議に出て皆さんの都市をすぐにも訪れたいと思いましたが、これはもちろん長い道のりになると思いますが、我々は勤勉に働いて次世代のためにぜひ成果を出していきたいと思っています。

吉本座長

バンコクのプレゼンテーションについて、私も少しだけコメントをしたいと思います。

これまでのプレゼンテーションになかったこととして、気がつかせてもらったことが幾つかあります。一つは伝統的なものを大変大切にしておられました。創造都市というのはヨーロッパ発の考え方ですから、私のプレゼンでもどうしても新しいもの、現代的なものに価値を見出すよう話になってしまいがちなのですが、アジアの国々はそれぞれ伝統的な文化があり、それで伝統的な文化というのは、ただ古いということではなくて、常に新しい革新が積み重なってきたものが伝統になっているわけですから、その伝統の中にこそクリエイティビティのいろんな種があるということ、バンコクのスクリッタさんのプレゼンテーションで気づかせてもらいました。

(7) ラウンドテーブル

吉本座長

それでは、ここから約 50 分くらいディスカッションの時間をとりたいと思います。

その前に質問票を出していただき、その中から事務局の方で選んでいただいた代表的な質問について、先にそれぞれの都市の方にお答えいただこうかと思ひます。

まず、観光のプロモーションについて具体例を知りたいという御質問をちょうだいしています。これは恐らく、釜山市さんへの質問だと思ひますが、残念ながら、釜山市さんは所用により帰られましたので、日本の都市で御出席いただき、まだ御発言の機会のないところをお願いしたいと思ひます。観光都市ということと言うと佐賀も観光で大変力を入れておられると思ひますので、佐賀市さん、佐賀市の観光プロモーションのためにどんなことをやってらっしゃるか、少し御紹介いただけないかと思ひます。

佐賀市

佐賀市はここに来ておる皆さんのまちと比較すれば一番小さなまちじゃないかと思ひます。人口 24 万人ぐらしかおりません。そのくらいのまちですが、その中で、佐賀市は観光としてどういふふうなことをやっているかですが、私は文化の関係で来ているものですから、観光の面でどこまで言い尽くせるのか自信はありませんが、佐賀の場合は、佐賀インターナショナルバルーンフェスタというのを、もう 20 数回、世界大会も 2 回開催しています。今年度についても 10 月の 29 日から 11 月 3 日までのその 5 日間、世界の 10 カ国程度でしょうか、100 数機のバルーンを、佐賀の河川敷から立ち上げました。既に世界的なイベントとして他の地域からも認められています。こんなにちっちゃなまちが、日本で一番大きな世界的な大会を行っているということが、佐賀市の観光一大イベントじゃないかなと考へています。

佐賀市の土地柄といひますか、土地というのは、ちっちゃなまちで、大きなビルや、そういうものがない。純然たる農村地帯で、広い平地があります。そういうことがバルーン大会に一番条件的に恵まれている。また、佐賀湾で吹いているその 10 月、11 月の風というのが、そのバルーンに一番難しく、また楽しいシチュエーションをつくり出しているということらしく、そんなところで世界的に認められて、20 年程度、世界に向けて、このスカイスポーツを通じて、佐賀を発信している現状があります。

吉本座長

佐賀からスカイスポーツというのが観光のプロモーションに役立っているということでした。長崎市さんも観光都市として大変多くの観光客が訪れていると思ひますが、同じ質問で、ツーリズム、文化観光のプロモーションとして何か工夫されている点があれば御紹介いただけないでしょうか。

長崎市

長崎市では今、「長崎さるく」というまち歩きをテーマとした観光プロモーションを展開しています。さるくというのは、長崎の方言で、ぶらぶら歩いて回るといふ意味です。長崎市は、三方を山に囲まれた急傾斜なまちで、平地が非常に少ないですが、その平地、あるいは山の斜面等に昔から歴

史あるいはさまざまな西洋文化あるいは中国文化の影響を受けた遺跡がたくさんあります。そういったところを歩いて回って、ゆっくり時間をかけて楽しんでいただくというプロモーションを展開しています。これは非常に健康にもいいですし、車等を使いませんので環境にも非常に優しいプロモーションになっていると思っています。

もう一つだけ申し上げさせていただければ、最近中国からの観光客の方が非常に増えておりまして、韓国からの観光客の方が一番多いのですが、まだ数的には少ないですが、中国からの観光客の方が確実に増えているということで、中でも国際観光船に乗って長崎を訪れていただく観光客の方が増えています。最近では、イタリアに本社がありますコスタークルーズのコスタ社ですが、そのアジアンショートクルーズというコースに乗り、長崎を含め九州の各都市を訪問していただいています。長崎市は非常に平地が狭いまちです。これまでは繁華街の中に大型バスが入る駐車場がありませんでした。しかし、今年は、市内の市街地の中に銀行が運営している駐車場があったのですが、それを半年間ほぼ借り上げ、そこにバスを何台か停める工夫を凝らしまして、ピストン輸送で岸壁から市街地まで中国の観光客の方を乗せて移動させるという工夫をしているところです。

吉本座長

古賀さんに対して質問が出ています。行政からの予算が減る中で、文化振興というのが、行政の予算が、お金がなくても可能だと思いますかという質問です。お答えが難しいだろうなあと、僕こんな質問嫌だなあと思いながら、あえて古賀さんに聞きますけど、いかがでしょうか。

古賀弥生（アートサポートふくおか）

お金はあった方がいいと思います。それはもちろん当然のことですが、行政がすべきことというふうに絞って考えるのであれば、私がちょっと述べさせていただいた中の、例えばグランドデザインを描いていくというようなこと等といった、イベントを打っていくという部分じゃないところ、行政じゃないとできない部分というのが確実にあるのではないかと思いますので、今のように経済状況が厳しいときには、そこのところをしっかりと取り組む、先を見据えてどういう方向にいくのだという絵を描くということをしかり考えるという方向に、力を注ぐというのもやり方かなと思います。

吉本座長

行政がみずから予算を投じて行う文化政策ではなくて、それこそ民間の力を引き出したり、さまざまな主体とパートナーを組めるような仕組みをつくっていくというようなこともあるかと思います。

ここで、今と同じ質問をこれまたちょっと意地悪な質問になってしまうかもしれませんが、国内から参加されている都市で御発言のない都市、二つの都市に御発言をお願いします。

まず、大分市さん、海外から来ていらっしゃる方に少し補足説明をしますと、日本の行政は、今、文化予算というのが非常に減っています。これは予算全体が厳しいということもありますが、どうしても文化の予算というのは最初に切られるような傾向にあります。その中で各自自治体とも非常に御苦労しながら文化振興をされていると思います。そういう点で参考になるお話があれば、大分市さんに少し御紹介いただきたいと思います。

大分市

今吉本先生が言われたとおり、大分市においても真っ先に文化行政のお金が実際に削られている

状況です。ただその中で民間の皆さんと協力をしながら、少しでも新たな取り組みをしていこうということで、大分市では昨年から大分夢色音楽祭というストリートステージをたくさん設けて、そこにプロアマ問わず、県内外問わず、アーティストの募集をかけて、演奏していただき、それによってまちづくりの、まちのにぎわいをつくっていかうといったようなことをしています。ただ、これについても、今年2年目ですが、市の方でかなり持ち出しの予算をとった上での事業ということで進めています。

2年目なので、初年度に比べると事業費的な部分というのは削られています。そんな中で、夢色音楽祭の実行委員会としては、将来的には自立ができるようにということで、広告協賛費を集めたり、物販を行ったり、いろんな意味で経済的な自立をしていき、将来的には自分たちだけの足で立っていかうという努力をしていただいています。そう言いながら、一方で、大分七夕祭というイベントが毎年開催されていますが、こちらの方も実行委員会をつくっておりまして、実際に祭の運営をしていますが、どうしても行政の支出がないと動けないといったような状況もありまして、これ切られたら一発でお祭が終わるそうだとしたこともあります。ですから、民間の皆さんの活力を引き出したいという思いがある一方、民間の皆さんも厳しい今の状況でどうやったらそういった活力部分というのを引き出せるかというのは、大分市も試行錯誤している状態です。

吉本座長

同じ質問を、熊本市さんにもお尋ねします。

熊本市

このたびは皆様方の御意見を拝聴いたしまして、大変参考になっています。実は私どもは、現在の政令指定都市への移行を見据えて動いているところですが、確かに文化振興関係の予算も毎年度減っています。その中で今後どのように進めていったらいいかというところを、今、実は模索中で、新しいビジョンを作成中です。今日、いろんな各都市の資料等を見させていただきまして、是非とも、早速参考にさせていただきたいと思いました。逆に質問をさせていただきます。

文化芸術の振興を都市の魅力を高めるために各都市でやってらっしゃるかと思いますが、その文化振興を戦略的に進めるためには、それをコーディネートできる人材の確保というのが必要ではないかなと思っております。その人材の確保をどのように行っていらっしゃるのかというのを、お尋ねしたい。

吉本座長

人材の確保の話は、この後の流れの中で議論のポイントにできればそこに返っていきたくと思いますが、今は文化予算の話が出ているので、それで少し続けたいと思います。

その一つ前の質問、人材育成ではないその前の質問で、公共の方の行政の予算が減る中で、文化振興をどうすべきかということですが、その点について、海外の都市の方で何か御発言をされたい方いらっしゃいませんか。

釜山市

先ほど日本の幾つかの都市で、文化予算が減っているということでした。釜山市では逆の方向に進んでいます。文化予算を次第に増やしている状況です。それは、その方が経済的効果があると判断

しているからです。また、産業化をするために、釜山市ではさまざまな努力を傾けていますが、それをすべてカバーすることはできないので、昨年からはメセナ活動を、初めて重点的に行っています。どのように行っているかと言うと、文化芸術団体が公演やイベントを行う際に、例えば 2,000 万円ぐらいのお金がかかるとしましょう。釜山市からその事業を促進するための全体予算を支援するのではなくて 1,000 万円ぐらいの予算を支援し、ある大手企業から 1,000 万円ぐらいの支援をいただいて、その公演を行うようにするメセナ活動を奨励しています。昨年から進めて、大手企業でなくても中小企業が多く参加しています。ですから、小規模の公演や、フェスティバルをより活性化させていく活動を昨年から進めています。釜山市あるいは企業の文化的な活力を取り戻す上でも大変好評を得ており、引き続きこの活動を続けていく予定です。

吉本座長

釜山市では文化予算を増やしているということだったのですが、その点、一つだけ確認をしたいです。それは釜山市全体の予算は余り増えていないが、文化予算は増えているということでしょうか。

釜山市

はい、そうです。文化予算を増やしています。また、中央政府のソウルなどに集中していた文化芸術予算を、自治体からの要請によって地方の文化芸術も満遍なく発展させる必要があるということで、その割合も、中央の文化予算を地方により配分して、地方の文化予算が増えています。

吉本座長

今の釜山のコメントは非常に重要なポイントではないかと思います。総予算が減るとイの一番に文化予算を削ると言う、日本のほとんどの都市がそうなっているわけですが、総予算は減っても文化予算を増やしている、その理由は、文化に投資をすることで、そのことがほかの分野、産業や、経済の収益となって返ってくるという、そういうポリシーがあるからではないかというふうに思います。

次は、シンガポールのティングさんに幾つか質問がきていますが、その中で一つ非常に具体的な質問に御回答お願いしたいと思います。

公共地区の文化施設の話、シビックディストリクトです。文化施設のさまざまな御紹介をいただきましたが、それらの文化施設は運営をだれが行っているのか。シンガポール政府が直接行っているのか、あるいは、民間のNPOのようなところが行っているのかということが一つと、そういう運営をするための人材というのほどどのように確保しているかと、その2点の御質問があります。

シンガポール共和国

最初の質問ですが、政府とそれからNPOと両方でやっています。ミックスの状態です。公共地区では、最初申し上げましたが、国立博物館、これは公共セクターが運営をしています。それからほかの劇場、これはNPOが運営をしています。ですから、アートフェスティバルなどいったところは複合的な運営です。公共部門も非営利セクターというよりもピープルセクターです。人々の部門がその運営を行っています。それから人材の確保ですが、奨学金制度がかなり充実しています。いろいろな芸術文化産業に関する奨学金制度がありますので、芸術家であれば留学をする、そういう場合も奨学金がありますし、あるいは、芸術的な運営に関する奨学金もありますね。例えば、人材に関しては

そういったカレッジもありますし、またその課程の間にそういった芸術団体にインターシップとして派遣をするというような制度もあります。それからまたほかの企業が勉強している間にインターンとして行くことや、それからまた、クリエイティブ産業、芸術文化系の産業、そういったものがたくさんありますので、そういった人たちが団体のメンバーとして20から25歳の人をインターンとして受け入れる制度がありますし、それからまた政府としては、教育施設、いろいろな講師をコーディネーター調整をして、うまく人材の育成ができるようなそういうシステムがあります。

吉本座長

中心地区の文化施設運営というのは政府組織だけではなくて、NPO、民間、あるいは複合など多様な仕組みを導入されているということですね。次に意見交換に移りたいと思います。

福岡市へ質問がきています。文化の発展とまちづくりが政策的に連携することは大切だと思うが、福岡市は都市計画局との連携というのをどういうふうに行っていらっしゃいますかという御質問ですけど、いかがでしょうか。

福岡市

都市計画局もいろんな政策をしています、一つは都市景観といいますか、きれいなまちをつくるということで、都市景観賞等、都市計画が行っています。それとわずかではあります、伝統的な町並みもありますので、そういう町並みを保存するような政策も、都市計画の方でやっています。今、特に動いている事業では、博多駅が新しくなります。後2年後ぐらいですが九州新幹線も通るということで、博多駅から天神周辺までいろんな施設、アートの施設もありますので、そういうものを含めていろんな方に見せられるような政策をとっていかうということを、都市計画では中心に取り組んでやっています。

吉本座長

今日の会議のテーマが「文化芸術による都市の魅力づくり」ということですので、いわゆる都市計画、都市整備のセクションと芸術文化のセクションが手を結んで何かユニークなことをしていらっしゃるということがございましたら、御発言、御紹介をお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

ウラジオストク

いろいろな問題を扱いました。つまり、文化の発展や、市の予算や、いろいろな問題が議論されています。市あるいは市政府は、ここで特別な役割を果たすべきだと思います。

ウラジオストク市の例を申し上げたいと思いますが、当市ではあるプログラムがありまして、それは市の文化政策に関するプログラムですが、来年、姉妹都市にウラジオストク文化センターを開館する予定です。このセンターはウラジオストク市が主催をする様々なイベントの宣伝をします。それから、別の目標として、このセンターを設けることで、ウラジオストク市に観光客を誘致したいと考えています。そして、ウラジオストク市で行われる文化イベントにさらに多くの方が参加していただきたいと考えています。また、この文化センターの中に展示のスペースも設けたいと思っています。そこでは情報ブースや、あるいは訪問者にイベントの情報を知らせ、あるいはウラジオストク市に関する情報を提供するような、情報発信の場を設けたいと思っています。

文化の振興と予算ですが、これはとても重要な問題です。そのためには投資を誘致することが必

要です。外国からの融資を促進したいと思っています。将来的にはこの今申し上げた文化センターは最初の段階は市役所が補助金を出していきますけど、外国からの投資を受け入れていきたいと思いません。

吉本座長

今のお話は文化セクションとそれから都市計画のセクションのいわば行政の中の分野を越えた協働というか、一緒にやるというようなお話だったんですけども、各都市の発表の中でも、例えば行政セクターと民間セクター、行政セクターとNPOセクター、あるいは行政セクターとビジネスセクターなどいろいろな行政セクター以外とのパートナーの話が出ていたと思います。それで今日この場に御出席いただいている皆さんほとんど行政セクターの方でして、その中で純粋民間の方は、福岡の野田さんと古賀さん、それからその周りに地元の民間の企業の方も出ておられるということ聞いています。もしこの真ん中のテーブル以外の方で御発言、あるいは御質問等なされたい方がいらっしゃったら手を挙げていただきたい。

野田さんに私から御質問をしたいのですが、野田さんのプレゼンテーションの中ですごろくのチャートがあって、私はあれを非常に興味深く思いました。福岡はもともと民間が非常に強い、民間のイニシアチブでいろんなことが行われている都市だというふうに私は理解していますけども、その中で行政が主導してものごとを立ち上げて、それがずっと進んでくるともう民間主導になって、行政のかかわりが薄くなって自立していくという、福岡はその段階に既にいるというお話だったと思いますが、ということは、今の状態に至るまでに行政がイニシアチブをとって何かいろんなことが起こった上で、その紺屋の取り組みや、野田さんの取り組みは起こっているというふうに考えてよろしいでしょうか。

野田恒雄 (TRAVELERS PROJECT)

僕自身が実は福岡が地元ではありませんで、まだ福岡に来て今年で7年目くらいです。なので、それまでどういう福岡市が政策をしてきたかは実は余り明るくない。ただ来たときに感じたこととしては、福岡の市としての魅力自体が既に僕が来た段階でかなりそろっていたというのはあります。その魅力は決して東京やニューヨークのような大都市の資本主義的な魅力でもなく、かといって、田舎の方の田園風景的な、牧歌的な魅力でもない、大変バランスのいい魅力を来たときに感じました。それは、例えば市の政策や、変わっていきそうだなと僕が予想して思うところできくと、やっぱり、僕は建築が専門でしたけれど、来たときに思ったのは、交通インフラがまずやっぱりコンパクトにまとめられていたことと、あと、空港が近いこともありますけど、建物のスカイラインがそろっていることによる、人に無意識に与える影響としての解放感や、都市計画としてのすごくまとまったきれいなまちだなとは思いました。僕は生まれが京都ですが、京都の基盤の目のようなエリアもありますし、あと市役所前の広場でアジアマンスや、ミュージックシティ天神という、ちょっとほかの都市では考えられないような、まちのど真ん中にそもそも市役所があって、しかも、そこが大音量で音楽ライブしたりということは、すごく来たときに驚きましたし、そういったほかの都市から見るとやりたくてもできないようなことが既に行われていたなという感覚はあります。そのときに、例えばじゃあ今僕がやっていることが、同規模の例えば神戸や、京都や、関西だと同じことができるかという、そういう意味ではできないかなと。やっぱりそれは福岡ならではの特徴の文脈の中で、僕の今続けている活動はおかれることになっていると思うので、そういう意味ではここまでの、福岡市が意図していたか

どうか別として、そこまでの基盤は自然となのか意図的なかわかりませんが、つくられてはいると思います。あとはそこから民間がどれだけその想像力を発揮して、民間でしか逆にできないことをその上に乗せていくか、その民間の動きを行政として、法的な整備等というところからどうやってバックアップしていくかということが、一つこれからの行政の役割だろうと思いますので、そういう意味で、横浜や、金沢等と言ったまちの民間が創造的な行為を乗せていくという段階に既に到達していると僕は思います、だから、そういう意味では、すごろく上で本当にちゃんと意図して福岡のところまで行政がこまを進めてきたのかはわかりませんが、何か知らんけど振ったらいきなり6こま出て、いきなりいつているのかもしれないけど、段階としてはそういう段階にあるんじゃないかなと思います。

吉本座長

今の点について、福岡市は、行政の立場から何かありますか。

福岡市

順番を追っていったというよりも、やはりプレゼンのときにも少しお話ししましたが、もともと福岡が芸どころ博多というような気質ございまして、昔からその市民ベースでいろんな文化活動といましようか、芸がやられていたり、今もあります。「どんたく」や、そういう祭もあります。そういうやはり昔からの博多の人の、福岡の人の気質や、そういう土壌が、今、野田さんが言われたようなものに大きく影響しているのかなと思っています。何か特に税金を投入して行政指導で何かをずっとやってきたや、いうことは、私が知る範囲で余りないのかなという気はしています。

吉本座長

周りにいらっしゃる福岡市の方、あるいは福岡の地元の民間の方でこの点で御発言されたい方はいらっしゃいませんか。

参加者

私の福岡市の民活の認識は、昔から民活、民活ということで力入れてこられたんですけども、その副作用で、行政に対して信頼というか信用がすごく低下しているのではないかと考えていて、逆に行政がこういうことやりたいと言っても、なかなか民間がついてこないような状態にまでなってしまうのではないかと思います。その辺をちょっと折り合いをつけながら、まあグランドビジョンはやっぱり行政の方が描いてもらうのがいいと思いますので、その上に乗っけていくものは、やっぱり民間で知恵を出しながらやっていくのがいいと思います。

吉本座長

今の御意見を私なりに解釈しますと、福岡市の民間セクターは、もう行政に頼ってられないで自分で始めようという、何かそういう状態にいるのかなというふうに私はちょっと思いました。

民間との協力ということでいくと、上海市さんは今、経済もすごく活発で、民間の資金が大量に入っていると思います。で、エキスポを来年計画されていると思いますが、当然、上海市さん、あるいは中国政府もそれに力を入れていると思いますけども、上海市さんが今やられている取り組みで、民間と協働して何かやっておられるユニークなことなどあれば、エキスポでも結構ですし、少し御紹

介いただけないかなあと思ったのですが、いかがでしょうか。

上海市

例えば私が先ほど申し上げました、市民と企業が、自発的に建築あるいは古い建物を使って集積したところが地域のスポットとなっていて、それから行政のバックアップをもらっているようなプロセスに今はあると思います。来年の博覧会に関しては、中国の国有企業以外、民間企業も積極的に博覧会の建設あるいは展示の配置、等に積極的に参加しています。多分協力していただいた企業のための特別なブースがあると思います。また、スポンサーとして参加する企業もあります。その博覧会の成功に力を添えていただいています。

文化芸術分野に限らず、いろんな分野の業種があります。その人たちは上海市のためにいろんな貢献をしています。他にも上海市ではビエンナーレを行っています。上海現代美術館で、上海で有名な人民公園の中にあります。時々近現代の美術の展示があります。これは市民の支持もあり、企業からの資金的な援助もいただいています。また、有名な画家や書道家の個人の作品を出していただいて、自分で投資してそこでオリジナルな展示会を開いています。これらはすべて芸術の普及のためにやっただけで、上海の現在の状況です。専門ではありませんので、私が答えられる範囲は非常に限られていますが、機会がありましたらぜひ上海まで足を運んでいただきまして、自分の目で確かめていただきたいと思います。

吉本座長

民間といってもノンプロフィットのNPO系のところもあれば、企業、営利企業といろいろありますけども、行政と民間の協力ということで、発言はありますか。野田さん、お願いします。

野田恒雄 (TRAVELERS PROJECT)

さっきのフォローと行政と民間の関係、吉本さんがどういう議論をされたいのかというところを勝手に僕がそしゃくしますと、ここに行政の人たちと後ろに民間の人たちもおられますが、やっぱり行政が主導しなければいけないというふうにかなり意識的に思われている行政の方も多いと思いますが、僕があそここのすぐろくで話したかったのは、さっき参加者の方もおっしゃられていましたが、確かに決して市役所がしてきたわけではない、むしろ不信感を抱いておられると言っておられましたけれど、でも、要するに、今のその状況を民間が、僕の場合勝手にああいう文脈をつくったわけですよ。こういう経緯で福岡はきていることにしよう。だからその上で行政の役割を決めよう。だから、行政として今までの、その土地それぞれの経緯が必ずあるはずですよ。その経緯は各土地によって当然違うわけで、世界各都市が創造都市を宣言してもこれは全然違うはずで、各都市それぞれで何を創造するかということが重要だと思います。だから、民間がそこにいますと、僕は民間側から言っていますが、とにかく行政としてそれまでのその経緯を見て、かつ時代と経済の状況を読んだ上で、この都市はこれからこういう方向にいくべきなんじゃないかということを示すことが、まずは行政の役割なんじゃないでしょうか。それに基づいた法制度や、予算、助成金等の支援制度の構築といたったことを進めれば、民間はそれに信用と協調さえすればおのずとついてくると思いますので、そういう部分では、行政がどういうふうに進んでいくかということを決めるということが大事なのではないかと思います。そういう意味では、突っ切っているような、それこそ国内では横浜、金沢、今日ここにおられる中でプレゼンテーションお聞きした限りでは、シンガポールや、いうところはか

なりのところまでいっていると思いますので、逆にシンガポールはその後どういう行政の役割に転じていくかということが、すごく重要なのではないかなと思います。釜山もそうです。

吉本座長

この会議自体が行政の方が代表して出られる会議ですので、その中で民間との話をするということにちょっと無理があるかもしれませんが。ですので、こんなことができるかどうかわかりませんが、来年度以降こういう会議をやるときに、行政の代表の方だけじゃなくて、ぜひ民間の方も一緒に参加できて、例えば民間の方同士、例えば野田さんとシンガポールのどこか民間の人、この間シンガポールからはコリン・ゴーさんをお招きしたんですが、そこでやっぱり何か起こりそうな気配がありますので、この会議自体が行政だけでなく民間も含めてイニシアチブになってほしいなというのを今、野田さんの意見を聞きながら思いました。

野田恒雄 (TRAVELERS PROJECT)

それに加えると、今日こうやって各都市がそれぞれ何をやっていきますという発表がありましたが、各都市が自分それぞれがやっていることを主張するところにとどめていても、僕も吉本さんと同感ですが、仕方がないと思います。むしろ、そういうふうにならざるを得ないことをやっているということに加えて、例えばこの都市とこういうことがしたい、もしくは、こういう都市の中でこういう役割を私の都市は発揮していきたい、もしくはあなたの都市にはこういう役割を果たしてもらいたいという都市間の連携を含めた文化芸術であったり、ということまで視野に含めたような議論が起ると、これだけの人が集まっている意味があるんじゃないかなと思います。

吉本座長

会議そのものへの提案の方にちょっと発展していますが、せっかくこれぐらい大勢の方が集まっていたので、建設的な御意見ありがとうございました。

それで、その前の、一つ前の話に戻って、ぜひシンガポールのケニーさんにお尋ねしたいのですが、今、野田さんのコメントにもありましたが、シンガポールの文化政策あるいは創造産業の政策というのは非常によくプランをされていると思います。ただ、シンガポールについて、時々私も聞く話ですが、行政がすごくきっちり、さっきの分厚い本がありましたが、しっかりとしたプランを立てて、そのとおりにいろんなことが政策として進んでいる。そのときに民間が、民間独自の発想で、例えば、福岡の野田さんが役所に頼らないで自分たちでやろうよというふうにして、民間が民間のイニシアチブとして何か始めているということがあったわけですけども、シンガポールの場合はその辺はどうなんでしょうか。民間独自の動き、行政の政策がすごくしっかりしたところの中で、民間が独自にさまざまな新しいことを始めているというようなことがあれば、それを御紹介いただきたいと思っています。

シンガポール共和国

私自身はそのプライベートセクター、民間といったときに、定義の仕方が非常に異なります。私たちは例えば営利目的で完全にビジネスを目的としたものと、営利は目的ではない、完全な市民の団体、NGOや、NPOというふうに分けています。ですから、それは二つに分けて考えるべきだと思います。そして、芸術文化に関して、それを発展させるときに何が推進力になっているかということ

を考えないといけません。我々は、確かに政府が主導権を握っていますが、その前に必ず市民、国民の意見を聞きます。それから、芸術団体、芸術機関、芸術文化施設のメンバー、そういう人たちから必ず意見を聞く公聴会があります。例えば新しい劇場建設の計画があったときも、一般市民に対して公聴会をやったり、専門職の人に対して公聴会を開いたりして、意見聴取をして直接の反応を必ず聞き取るわけです。ですから、一つのレベルではもうその最初の段階、政府がやっている最初の段階というのが、市民からの意見をまとめるということです。それから、シンガポールというのは非常に若い国です。ですから、要するにNGOなどというのはまだまだ今育ちつつあるという段階で、もちろん我々の仕事に対して参加したがついています。しかし、非常に残念なことに、シンガポールというのは非常に国土が狭いわけです。結局土地を借りるなどという非常に高くつきますので、そのために、結局個人で、民間レベルでそれをやろうとすると、余りにも土地の賃貸料、場所の賃貸料が高くつき過ぎて、なかなかその活動ができないという面があります。だからこそ、そこに政府主導型の補助が入ってくるわけです。もちろんNPOはそういう施設を使おうとしたときには、時間がなくてさっき私は話せませんでした。実は政府の方がその補助をするわけです。そして適切な施設や、適切な土地を探してあげて、そしてその利用を手助けします。普通は旧植民地の時代の建物ですが、そこで非常に妥当な賃貸料というのを設定して、芸術文化団体が使えるように我々としては支援をするというやり方をしています。同じように、民間の個人の美術館や、収集家、コレクターに対しても働きかけておりまして、その土地の賃貸料、使用料に関しても戦略的に価格設定をするというようにやっています。ですから、ある意味では、シンガポールの場合には完全に純粋に民間で何もかもやるというのは芸術文化活動については難しいという問題があります。これはもう土地の問題がかかわってくるからです。しかし、我々はあくまで努力を続けて、少なくともできるだけ幅広い政策を設けて、そういう文化芸術の団体が土地を借りたりして活動できるようにしています。

吉本座長

今御指摘いただいたように、民間と一言で言っても、ノンプロフィットの民間と非営利セクターの民間というのは確かに分けて考える必要があると思います。私がシンガポールに行ってケニーさんに伺った話で、非常に印象に残っていることが民間との協働でしたので御紹介します。すばらしい絵画をオークションで個人の方がコレクションをした場合に、その1週間後位にすぐに、シンガポールの国立美術館でちゃんとそれが展示される。つまり市民の持っている、民間の持っている財産を公共セクターのところに出して、それをシンガポール市民に還元していくというそういう協力の体制というのがあるということが、凄く興味深かった。それから、ケニーさんの同僚の方でノリスさんという方がいらっやって、創造産業の専門のセクションなのですが、彼がおっしゃっていた民間との協働のことも私非常に印象に残っているので紹介します。芸術文化のように市場で成り立たないものについて、シンガポール政府は助成制度、行政が支援をする。だけど創造産業のように最終的には民間ビジネスで成り立つものについては、立ち上げ時期はシードマネーであつたり、あるいは場所であつたり、インフラは用意しても最終的には政府は全く関与しなくなるというのがゴールであるというふうにおっしゃってまして、民間との関係も非常に戦略的に整理しながらやってらっしゃるというのが印象に残っています。最後に発言をされる方いらっしゃいますか。

広州市

皆さん、こんにちは。広州市は福岡市と姉妹都市です。また今年は30周年という記念すべき年で

もあります。まず今日御招待いただきました事務局の皆様にご挨拶を申し上げます。

また、シンガポール、福岡、芸術による文化、都市の文化を高めることについての御講演いただきありがとうございます。私も行政の仕事をしています。上海の陳さんと同じですが、文化芸術を通して都市の魅力を高めていくのは、中国においては、政府のバックアップがないとなかなか実施できないと思っています。自分のまちの芸術文化の促進をするために行政の政策、それから資金の援助、これはどうしても必要です。これはほかの都市、ほかの国とはちょっと違うかもしれませんが、まず私の理解ですが、自分のまちをもっと魅力的にしていこうと思うならば、いろんな局、部門の協力が必要になってきます。例えば、まちの美化部や、そういう力はやっぱりどうしても必要です。もちろん、民間の力も大きいですが、ただ民間の力だけでは中国ではなかなか難しいです。今、民間といえば企業と慈善家たちの寄附によるものぐらいでしょうか。また、中国は特徴のある社会主義の政策をとっています。文化芸術の推進に関してもやはり特徴のある政策をとっています。広州は中国南部の開放の窓口として位置づけています。また来年は広州で全国のスポーツ大会：アジア大会という祭典があります。広州は花の都とも呼ばれています。実に広州は美しい、また芸術を通してその魅力づくりに関しても大変先進的な取り組みをしていると思います。その中で行政の力は非常に大きいです。私は行政の仕事をしているので、こういう話を申し上げるわけです。今日はいろいろなプレゼンを聞かせていただきました。これを、帰りましたら整理をして報告書にして関係部門にぜひ提出し報告させていただきますと思っています。各都市の先進的な取り組みを参考に、広州の魅力を一層高めていきたいと考えています。また、この機会を利用して、皆様に来年民間でも行政でも、ミッションをつくっていただき、また広州まで足を運んでいただき、アジアスポーツ大会と、美しい広州を見ていただきたいです。

吉本座長

最後に一言発言させていただきます。私も今日午前中からアジア太平洋地区の諸都市の方々と一緒に時間を過ごすことができ、大変勉強になりました。一つ、幾つか今日の一日を通じて思ったことがありますけども、一言で文化や芸術による都市の活性化と言ったときに、文化もそれぞれの都市や国でまちまちで、全く多様と言いますか違いますし、その背景となる都市というものも、環境も違えば抱える問題も違うということで、一つの回答はないということを非常によく、改めて理解することができました。ただそうした中でも、今日御発表いただいた各都市の皆さん方は、文化や芸術というもので、都市に活力を取り戻そうという、それぞれの方法で、それぞれの戦略でいろんなことをやってらっしゃるということが、私は大変勉強になりましたし、今日参加いただいた皆さんもほかの都市のそういう取り組みで、何らかのこれからの皆さんのご自身の都市の政策に参考になることが少しでもあったらよかったなあというふうに、司会進行者として思います。

もう一つ重要だと私が思いますのは、このアジア太平洋都市サミット、今年で8回目です。実務者会議として8回目になるかと思いますが、このタイミングで文化というものにテーマが当てられたということがやはり重要なことではないかと思っています。それは昨年度のリーマンショック以降のいわゆる金融資本主義という考え方、あるいは社会的な規範、はっきり言ってしまうとアメリカ主導型のグローバル化の規範というものが大きく崩壊去ってしまっているわけで、その中で、文化というものを軸にしてもう一度都市のあり方、あるいは私たちの暮らしのありかた、あるいは将来のことなどを考え直すというのが、今の時代に求められている非常に大きなパラダイムの転換になっているのではないかということです。もちろん、文化と言っても本当に多様ですから、それを一筋縄にく

くることはできないと思いますけども、今日この場所で、福岡で文化ということを切り口にして、それぞれの文化も違う国、都市の方々それぞれの置かれた環境も課題も違う国々や都市の方々が集まって、とにかく文化で私たちの将来を考えようというようなディスカッションあるいはプレゼンテーション、報告ということが行われたというのは、大変意義深いことだったと思います。

次回は、ウラジオストクで開催されるということで、テーマはこれから検討されるかと思いますが、ぜひ文化による都市の活性化、あるいは文化による将来のビジョンを考えるということは、ぜひこのアジア太平洋都市会議の参加されている都市の方々にはぜひ続けて、またこのテーマでディスカッションできるような機会が持てればいいなあというふうに個人的に思っています。以上でディスカッションを終わります。

(8) 閉会式

①イポー市長挨拶

イポー市長 Dato' Haji Roshidi Haji Hashim

こういった文化そして芸術を振興することによって都市の活性化ということは非常に興味深いことだと思います。そしてまた、伝統文化がある、それは単に観光の促進だけではなく、都市の活性化につながるということで非常に学ぶことが多かったと考えます。吉田市長、そして福岡の皆様方に対して、温かく迎えていただいたことに感謝申し上げたいと思いますし、またそれと同時に、今回のこの会議の事務局の方々、非常にこの会議の準備に当たって尽力されたことに対して、感謝申し上げたいと思います。実は、私は以前にこちらに福岡に参る予定でございましたが、実は予測できない問題が起こりまして、それは延期せざるを得なかったわけですが、しかしながら、ときが実れば物はなすと申しますか、非常に適切なきに、今回訪れることができまして、非常にうれしく思っています。

この福岡に初めて参りましたが、非常に清潔であるということに感銘を受けたわけですが、なぜこれほどきれいなのですかと伺ったところ、これは小学校のときからそのような習慣づけ、またこういったまちをきれいにしなければならないということは、それぞれの義務であるということをして小学生のときから学んだということをして、非常に感銘を受けたわけです。

実は、1989年から福岡市とイポー市は姉妹都市関係を結んでおり、この期間、2都市間においては非常に成功裏にこの姉妹都市関係を充実させて来ました。さらにこのような関係を強化していくために、いろいろなことをしようとしています。また、この福岡大学の衛藤学長ですが、初めてお目にかかることができまして、初日にお目にかかることができましたわけです。私どものペラク女王がここの教育学における博士号を授与していただくという計画があります。こういったものをいただくということによりまして、2都市間の関係がさらに活性化するというふうに考えています。また、この大学のスポーツ科学学部に訪れることができましたが、巨大なキャンパスに感銘を受けました。このようなところで競技者がより知識を身につけ、そしてコーチになっていくということは適切なことだと考えています。そして、福岡大学のスポーツ科学部とマレーシアの大学UPS Iとの間で、2学部の交流をさせようということ、そういったディスカッションがございまして、覚書を間もなく調印する予定になっています。恐らく今年中に覚書に署名することになると思います。

また、この機会を活用させていただきまして。吉田市長に対して感謝申し上げたいと思います。初めてのモスクを福岡市で建設をするということ、実はこれが長年ディスカッションされてきたのですけども、今年実現するということになったと伺っています。多くの話し合いがなされたということですが、この建設に当たりましては、吉田市長が非常に尽力いただいたということをして伺っています。感謝申し上げたいと思います。またそれと同時に、実は私の希望でもありますが、ハラールに則って処理された食品を取り扱うようなレストランを福岡でもオープンしていただきたいと考えています。福岡の方々に対しては、実際イポー市に来ていただいて、いわゆるそのハラールに則って処理された食材で調理する和食のお店を出していただきたいと思います。実は同じようなことがインドネシアのメダン市で行われておりまして、今年の8月にこのレストランがインドネシアで、インドネシアの料理でハラールにのって処理された食材が料理されているというところが8月にオープンしました。マ

レーシアというのは多民族の社会であり、マレー人、中国人、インド人、そしてサラワックの民族、部族などから成り立っているわけであり、そういう意味では非常に文化豊かであるわけです。昨晚、アジア文化賞では4名が授賞式に臨みまして授賞され、非常に心に残る式典でした。福岡の方々が学術、芸術、文化を大切にされるということはすばらしいことだと思います。私どもはマレーシアの文化も促進していきたいと考えています。マレーシアとしても美術芸術に大きく貢献することができません。また、単に福岡の皆様だけではなくて、会議に参加されている皆さんにぜひ私どもの文化に触れていただきたいと思います。私どもはいろいろレベルでもって協力をしていきたいと考えています。そして力を合わせて調和に富んだ、そして平和な、豊かな世界、つまり一つの夢、一つの希望、一つの世界をつくり上げていきたいと考えています。また御参会の方々にはこれからも御繁栄があること、そして健康であられることを祈念いたします。すばらしい会議であったと思います。皆様にお目にかかれて非常に光栄です。この会議の思い出、そして福岡の思い出を持って私の国へ戻りたいと思います。

②次回実務者会議主催都市挨拶

鹿児島市国際交流課 主幹 樋口和弘

本日、「第8回アジア太平洋年サミット実務者会議」の場で、次回、実務者会議開催候補地として、アピールする機会を与えていただき、大変光栄に存じています。また、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

皆様のお手元に、鹿児島市のパンフレットをお配りしてありますので、ごらんいただきながら、鹿児島市の紹介を簡単にさせていただきたいと存じます。

鹿児島市は、日本の南、九州本土の南端に位置しており、人口約 60 万人を有する中核都市であります。中でも、市街地の正面、錦江湾を挟んで、世界有数の活火山である桜島がそびえており、その美しい景観から「東洋のナポリ」と呼ばれています。また、市内各地には、火山の恩恵により 200 カ所以上の泉源から温泉が湧出しており、国内外から年間 860 万人に及ぶ観光客が訪れる国際観光都市です。

また、約 150 年前、当時の江戸時代の幕府体制を変革し、明治維新の原動力となった地であり、多くの歴史と豊かな自然を有する都市でもあります。

鹿児島市は、南の海に面して開かれた地理的特性を有し、古くからアジア各国や西洋諸国との交易の窓口として、長い交流の歴史を持っています。

現在、姉妹友好都市として、中国の長沙市、オーストラリアのパース市、イタリアのナポリ市、アメリカのマイアミ市と活発な都市間の交流を続けています。また、地理的・歴史的に関係の深い、アジアの各都市との交流にも積極的に取り組んでいます。毎年、秋にアジア各国の青少年が集う「かごしまアジア青少年芸術祭」を開催しています。この芸術祭では、アジア各国の青少年と鹿児島市の青少年が音楽を通じた交流を行い、非常に有意義なものとなっています。

交通アクセスを申し上げますと、現在、中国の上海浦東空港並びに韓国の仁川空港との間に定期航空路線が就航しています。上海までは1時間40分、韓国までは1時間35分の所要時間となっています。

また、海外の国際路線が多く就航していますこの福岡からは、航空路線と高速鉄道で結ばれています。特に、高速鉄道である九州新幹線は、2011年の春にはすべての路線が開通し、1時間20分で鹿児島へ到達することになります。

このようなことから、九州新幹線が完成する2011年という記念すべき都市に、今回のアジア太平洋都市サミット実務者会議を鹿児島市で開催できましたならば、大変光栄なことであると受けとめています。

さらに、アジア各国の皆様が鹿児島市にお集まりいただき、都市の魅力や機能を堪能していただくことは、本市とアジアとの交流がさらに活発になるものと期待しているところであります。

最後になりますが、次回、鹿児島市で皆様にお会いできることを、60万人の鹿児島市民を代表してお願いし、御紹介とさせていただきます。

③次回市長会議主催都市挨拶

ウラジオストク市国際関係・観光局 局長 Viacheslav KUSHNAREV

最初に、アジア太平洋都市サミット実務者会議の事務局の皆様にご心からお礼申し上げます。今回は都市の魅力をふやし、そして文化芸術活動を通じて都市の魅力を高めるというテーマのもとに第8回実務者会議が行われました。

皆様御存じのように来年のアジア太平洋都市サミット市長会議は、ウラジオストク市でわれます。9月29日から30日まで、2010年の予定です。テーマはアジア太平洋都市の持続可能な開発、経済危機における新たな都市政策です。

そしてこの機会に簡単に私どもの都市について御紹介したいと思います。

ウラジオストクは、ロシアの極東部にありますプリモスキー地域の最大の都市です。ここはこの地域の産業、交通、科学、文化の中心地であり、またアジア太平洋沿岸に面したロシア最大の港湾都市です。

ウラジオストクが、都市として設立されたのは1860年です。今現在人口は60万人以上あります。そして、モスクワとウラジオストクの間はシベリア鉄道で結ばれています。この長さは9,288キロメートルで、世界最長の鉄道ネットワークです。

そして、私どもは劇場が非常に重要である、市の文化生活上で重要であると考えています。劇場の名前を申し上げますと、ゴーリキー劇場、会議所劇場、人形劇場、それからプリモスキフィルハーモニックホールもあります。そのほかに、サーカス場、それから映画館や展示会場などもたくさんあります。

そのほかの美術館、博物館としては、地域研究博物館、太平洋艦隊博物館、海洋学歴史博物館、これなどが有名ですが、また同時に、ロシア地理学会の支部も私どもの都市に設置されています。

プリモスキー地域の一番大きな歴史的な中心地がウラジオストクです。そして、歴史的な記念碑は市内に200以上もあります。また、20世紀初頭にさかのぼる非常に古い建物もたくさん残っています。

そして、ロシアの中では、ウラジオストクは外国公館の数が3番目に多い都市です。17人の総領事と名誉領事がございまして、領事館がこの市内にたくさん立地しています。

現在は非常に多額の投資がこの市のインフラ開発に投じられています。そして 2012 年の APEC サミットの準備も進んでいます。この目的としましては、ゴールデンホーム湾とラスキー島との間をつなぐ橋の建設計画があります。これはまた、将来は太平洋連邦大学のキャンパスになる予定でもあります。

そして、この機会をいただきまして、ぜひここにいらっしゃる皆様に来年ウラジオストクに招待したいと思います。また、それ以外のときでもぜひ私どもの都市へいらっしゃってください。そしてまた 2010 年には皆様をお待ちしています。

④アジア太平洋都市サミット事務局挨拶

財団法人福岡アジア都市研究所 理事長 樗木 武

私は福岡市と一緒に今回この実務者会議のお世話をさせていただきました。代表して一言御礼を申し上げたいと思います。

今回のテーマは、文化芸術活動における都市の魅力づくりということでございました。基調講演の中で、吉本さんからそれでは生ぬるいと、文化芸術がなければ都市は生き残れない、それぐらいの気概が必要だと御指摘いただきました。これを私なりに解釈すれば、都市というのは基本的には人がいて、都市の機能と都市の活動があるということですが、その根源が都市の文化芸術であるというような御指摘だと思います。そうした都市の文化芸術のテーマを2日間にわたって皆さん方で実際に見たり、こうして討論したりしていただきました。

1日目は、福岡の文化活動を紹介するという事で何か所かを見ていただいたわけではありますが、それぞれに御批判もあり、あるいは御感想もあろうかと思いますが、私どもとしては、そうした思いを少しでも持たれたことが、逆に言えばこのシンポジウムを開いた意義であるというふうにも思います。

その上で本日は、まず吉本様からアートで都市の未来を切り開くという基調講演をいただきました。人の心に訴えながら都市の中にハートを創造することが都市にとって大変重要であるという話を国内外の事例を踏まえてお話しいただき、大変参考になったところです。これを受けて福岡市、釜山広域市、シンガポール、それにバンコクの都市の文化芸術の取り組み、活動内容を紹介いただきましたし、またそれらに対する質問などを通じまして、多くの都市がこの文化芸術に真剣に取り組んでおられるという実態を明らかにしていただきました。

その上で討論会を開いて掘り下げを行っていただいたわけではありますが、各都市とも大変な努力と熱意で、そしておのおのに工夫を凝らして文化芸術の都市を目指しておられるという状況をつぶさに話していただいたところございまして、大変興味あるところでした。

それらを並べて私なりに一言だけ整理させていただきますと、文化芸術というのは、国を越え、ときを越えて人の心に訴えるそういう普遍性、ユニバーサル性と言った方がいいかもしれませんが、そういうことがわかり、今日の話聞きながら、どの都市にも訪れてみたい、見てみたい、触れてみたいという思いにかられたところでもあります。皆さん方はいかがでしたでしょうか。

その一方で、都市がおかれている環境、民族性、歴史、そうしたものが、この文化芸術に絡んで、それぞれ独創的な、創造的な文化芸術が多様に生まれてきているという状況ですので、そこにははか

り知れない奥深い内容があるのだということを認識したところです。

都市の文化芸術というのは、こうした二面性の中で、都市の質を向上させ、個性を発揮させ、その中から新しい都市の価値が生み出されるというような討論の結果であったというふうに思います。

そういう内容を踏まえてみますと、文化芸術をたった2日のシンポジウムですべてを語り尽くすということは、しよせんできないことですが、少しでも今日ここで情報交換いただいたり、あるいは討論されたりしたことは、皆様方のそれぞれの都市にお持ち帰りいただいて、その上でさらに磨きを、お互いに競合し、競争社会的にもお互いに励み合い、そしてプラス連携というものを組み立てていければ、そういうふうに役立っていただければと願います。

本日は、7カ国 17 の都市から参加いただきました。そして都市の取り組み、あるいはそこで抱えている課題、そうしたことをさまざまに語っていただいたことに厚く御礼を申し上げます。

それから、各都市からの参加者だけではなくて、今日は市民の方々も聴講いただいています。そうした市民の方々に、御熱心に御清聴いただいたことを御礼申し上げます。